

— EVANSVILLE

成田から約十四時間の飛行でデトロイトまで飛び、そこから南に向かって約二時間、国内線のプロペラ機で飛ぶ。そこがエバンスビルである。目の前をくねくねと曲がりくねったオハイオ川が流れており、その川が隣のケンタッキー州との州境をなしている。でっかい川である。これがルイジアナから千キロ余の距離をさかのぼってきたミシシッピ川の支流だというから、そのスケールの大きさに驚く。

エバンスビルはインディアナ州の最南端に位置する中くらいの都市だ。ロスやニューヨークのような大都会ではなく、かといって隣の家まで行くのにクルマで数分もかかるような田舎町でもない。アメリカ的な風景や、アメリカ的な人たちを、あちこちで見かけられる居心地のいい町である。気候は冬は非常に寒く、夏は非常に暑い。でも、狭く暑い日本どこかに住むのに比べれば、充分おつりがくるような暑さ寒さである。

エバンスビル大学は、市内のほぼ中心部を南北に走る高速道路四一号线と、東西に走る六六号线が交差する南東側の角に位置している。学生数二千六百人ぐらいの小さな私立の大学である。空港からクルマで約一〇分、四一号线をまっすぐ南に向かって走り、直角に交差する六六号线を過ぎてすぐ、ウォールナットストリートを左折して約百メートル進むとエバンスビル大学の敷地に入る。

ウォールナットストリートは大学のキャンパスを真っ二つに縦断している道路で、一般車両が学園内を行き交っている。四一号线側から大学の敷地内に入ると、ウォールナットストリートの右側が校舎や寮が建ち並ぶ敷地で、左側の敷地は主としてスポーツ施設で占拠されている。一九九八年の夏、初めてエバンスビル大学を訪問した時、慎子に「お前の元気な姿を写真に撮ってお母さんにおみやげに持って帰るから正門の前で記念撮影しようよ」と言っていると、「ウーン、正門っていうかあ、とにかく門なんてないんですよ。どこからでも出入りできるんです」と慎子は言った。見回すと確かに囲いが無い。囲いがないどころか、ウォールナットストリートのように信号付きの一般道路まで学園の中を走っている。大それた家もそうだ。一九八四年、私が初めて渡米した時に受けたアメリカの印象が「広い」ということと「家と家を仕切る囲いがない」ということだった。狭い日本を脱出してアメリカの地を踏むとそんな景色が目飛び込んできて、「アメリカの人たちの心のおおらかさがそんなところに出ているのだなあ」とひとりりで納得して感心する。

話はいきなりカリフォルニアに飛ぶが、UCLAを案内してもらった時も驚いた。「ここがUCLAですよ」と言われてもわからない。商店街と大学を区別して仕切るものがないのである。しかも学園内を何本も一般道路が走っていて、一般車両が学園内を行き交っている。ブックストアがまた驚きだった。町の中にあるショッピングモールなのか学内の施設なのか区別がつかないのである。

話を戻そう。慎子が住んでいるところは学園の中のモア・レジデンス・ホール（#十九）である。そこでルームメイトと二人で住んでいる。通常の生活は、午前中がほとんど授業で午後三時過ぎからカーソンセンターで練習をする。残りの時間は何をしているかという慎子の場合は特別で、ショッピングや遊びの時間を他人より少なくして、授業の予習復習や練習ビデオを見ることや、夜に寮の仲間とスチューデントフィットネスセンター（#四二 以下ジムと呼ぶ）でバスケットボールをして遊ぶことに充てている。慎子は、そのジムには深い思い入れがある。

慎子は一九九七年の春、エバンズビル大学の付属英語学校に入校した。英語をマスターするためである。キャシーは慎子を奨学金選手として受け入れると確約しているが、バスケットボール選手として留学するだけでなく、エバンズビル大学の学生として正式に入学するのだから、バスケットボールがうまくなることよりも、まずアメリカの大学の授業についていけるだけの英語の力をも身につけなければならない。英語学校はもちろん学内にあり、慎子は学内の寮に入って生活するのだがまだエバンズビル大学の学生ではない。あくまで入学予定者である。

これが日本だと、英語の授業が終わったあとは大学の体育館でチームとともにバスケットの練習ができる。ところがアメリカのNCAA（全米大学体育協会）には厳しい規則があり、まだ入学が正式に決まっていない選手がチームと一緒に練習したり、コーチがその選手と接触したりすることは禁じられている。もしそれに違反すればチームがその年の公式戦に出られなくなるか、またはコーチが活動を停止させられるかのペナルティを食らう。

留学の準備を何もせず、一言の英会話もできなかった日本の高校生が、アメリカの大学に学生として受け入れてもらえる基準点のTOEFL五〇〇点をクリアする英語力を身につけるまでに、まず二年はかかるというのが相場だそうである。それを慎子は一年と少しでマスターしなければならず、しかもその間、自分のプレイや体力が落ちないように維持するのをすべて自分で管理しなければならないのである。英語の勉強をしながら身体的なことまで自分で管理するのは、大変な意志と努力を要する。事実、慎子は渡米して四ヶ月後、丸々と太ってしまった。慣れないアメリカの食事、すべての領域において指導する人もいなければチェックしてくれる人もいない状況、それが日本での慎子を知っている人が会っても、しばらくしなければ慎子と判別できないほどに彼女を変えてしまったのである。

しかし、当の本人はそのことの深刻さにはあまり気付いていない。気付いたのは慎子のアメリカ留学をコーディネートしてくれたガイ・ヒーリー夫妻が、四ヶ月ぶりに慎子と会った時である。その時ヒーリー夫人は、本当に彼女が慎子かどうか確かめたくて「あなた、慎子ちゃん？」と聞いた。それでようやく慎子は、自分の変貌ぶりに気付かされたのである。慎子が太ったということを、ガイ・ヒーリー夫妻は長崎に戻ってから真っ先に私に報告した。私はすぐ慎子に国際電話をかけた。

「太ったんだってなあ」

「はい、少し…」

「俺、まだ走ってるぞ。距離は五キロを八キロに延ばした。三五分から四〇分ぐらいのタイムだな」

「…」

私は、単身アメリカに乗り込んだ慎子の生活が、如何に大変なものであるかを想像できるからそれ以上説教がましいことを言うのは避け、普通の会話をいくつかして電話を切った。それからしばらくしてキャシーからガイさんに電話が入った。それをガイさんはすぐ私に知らせてくれた。

「シンコ、マイニチハシッテルミタイヨ。キャシーガソウイッテタ」

「どれくらい？」

「マイニチ五マイル（＝八キロ）…サンジユウゴフングライデハシル？。ハヤイネ」

慎子は、ガイ夫妻に久しぶりに会い、その時のガイ夫妻の驚きの表情を見てハッと我に返ったのだろう。それから毎日八キロのランニングを日課に加えたのだ。自己管理の面でもうひとつ救われたのが前述のジムである。ここは英語学校入校以来、唯一、慎子がバスケットボールという競技に触れ続けられた場

所である。

このジムは、チームがいつも練習しているカーソンのすぐ裏手にある体育施設で、中に入るとまずバスケットコートが二面取れるフロアーがある。二面といっても日本のミニバスケットコート程度の広さのコートが二面である。一般の学生が汗を流す施設だからそれでいいのだろう。その隣には室内プールがある。二階はトレーニング器具が所狭しと置かれたトレーニング室である。

この施設を利用する学生は、入り口の受付係に学生証を見せ、そこで必要なものを借りる。慎子が借りるのは、もちろんいつもバスケットボールである。そして、シューティングやドリブルなどの技術を自分で練習する。初めはそうして自分で練習していただけだったが、そのうちいつもそこでバスケットを楽しんでいる男子学生たちの仲間に入れてもらえるようになった。男子学生たちは、いつもスリー・オン・スリーや簡易ゲームをして楽しむのだ。楽しむといっても、アメリカの学生たちの遊び感覚のプレイは、日本に持ち帰ればインカレ一部クラスだというのがめずらしくない。そんな中に慎子は混ぜてもらったのだ。彼らにとつてはいい汗流しの遊びかもしれないが、慎子は真剣に走ったり跳んだりしなければとてもついていけない。

アメリカの大学でバスケットボール選手となることを目指して日本を離れた慎子は、一人黙々とロードワークをするだけでなく、このスチューデントフィットネスセンターという施設があったおかげで、バスケットボールを身近に感じながら英語の研修を続けられたのである。その時のことを慎子はあとになってこう語っている。

「アメリカという国は、自分の主張をしつかり表現しなければいつまで経っても認めてはもらえないんですよ。ジムでの遊びのバスケットでも、最初は私にパスをしてくれないんです。そのうち、『アメリカということところは、自分は何ができるかを見せなければ認めしてくれないんだ』ということがわかって遠慮せずにどんどん自分のプレーを見せ始めたんです。すると勝手に私にパスをくれる回数が増え始めたんですよ」

そして慎子は、しばらくしてジムに集まる仲間たちからこう言われている。

「おまえ、日本からバスケットをするためにエバンスビルに来たのか。そうか。がんばれよ。俺たちみんな応援するからな」

一九九九年二月十七日。私が慎子の試合を初めて観た日。ロバーツの私たちの座席に数人の男の子たちが押し掛けてきた。

「あなたは日本から来たのですか？ 慎子のコーチですか？」

「そうだよ」

「僕達いつも慎子の応援をしています。慎子はすばらしい選手です」

「そうさ。あいつはハートがすごいんだ」

「いつまでいるんですか？ 次の試合も見られますか？」

「そう、この試合と二二日の試合の二試合見てその次の日に帰るよ」

「そうですか、僕たちも一生懸命応援します。楽しんでください」

この男の子たちの中には、昨年TOEFLの勉強中に慎子と一緒にバスケットをしてくれた仲間はいない。この男の子たちは、今年入ってきたフレッシュマンばかりである。が、ジムに集まる学生たちの間には、いつの間にかこうして慎子の応援隊になるといふ雰囲気が出てしまっていたのである。あとでもこのことは話すが、私はアメリカの人たちの、「いいものはいい」とすなおに認め、相手を心から讃える豊かな気持ちは本当に美しいと思う。その学生たちは、「ルールが一番近い学生席の一角に陣取り、特大の画用紙にカラフルな英語の文字を書いて、慎子が何かいいプレイをする度にそれを振り回して、

「SHINKO!」と歓声をあげていた。

今回のエバンズビル訪問は、ジャパンエナジーの三上コーチと、慎子の無二も親友である工藤雅子（鶴鳴時代のキャプテン）を誘って三人で行った。しかし、添乗員のつかない自分たちだけの旅行はいろんなことで手間取る。私たちがエバンズビル空港に着いたのは二月十六日の夕方五時頃。そのまま乗りいけばホテルに荷物を置いて大学まで足を伸ばし、慎子の練習が見られるはずだったが、荷物が見つからないやら何やらで時間を食い、ホテルに着いたのが遅くなってしまっただけ。その日は慎子と電話で話した。会って話をする時間はなかった。

次の日は試合。慎子は午前中は授業で、午後四時半から試合だからとてもゆっくり話す暇はない。その日は私たちも三時にはロバーツに行き、試合前の練習から見学した。この日のことを少し話そう。

私たちがスタジアムに着いたのは三時を少し過ぎた頃、アシスタントコーチのベトウザー（以下コーチBと呼ぶ）にボール拾いしてもらいながら、慎子はすでにスリーポイントシュートの練習をしていた。しかしまだチームの正式練習ではなく、他に三人ほどコートに居たが、皆それぞれ自由に身体を動かしているだけだ。私たちがスタジアムに姿を現すと、まだ観覧席の最上段近くをうろろしている私たちを、慎子が目ざとく見つけてフロアから手を振った。コートサイドまで下りていって一言三言話す。慎子はまたシューティングに戻る。次第に選手たちが増えてくる。遠くから私たちを見つけて手を振る選手、近くまで走り寄ってきて挨拶する選手とさまざまだ。私たちを見つけて近寄ってきた二年生のアーデンが何か話しかけてきた。慎子が通訳をする。

「試合前のミーティングの時、ミーティングルームに来てくださいですって」

通常、少々親しい人であっても、試合前のミーティングルームには他人を入れない。それを入れるのだから私は特別待遇なのだろう。部屋の隅っこでミーティングが始まるのを待っているときいきなりキャシーの口から、「エイブラハム・リンカーン」、「ジョージ・ワシントン!」ということばが飛び出した。勇気と決断を説いているのである。ポストプレイとかスクリーンということばではない。きっとキャシーはオフィスが自宅のどちらかで、試合前の演説の練習をしてきたはずだと私は思った。

私を呼んだのは、ミーティングのそんな様子を見せるための心配りだと私は勝手に解釈して、部屋の隅で遠慮がちにキャシーの話をだまっていたが、それは私の勝手読みで、実は私にはちゃんと役割が用意されていたのである。キャシーの話が終わると選手たちは私の周りをグルッと取り囲んだ。慎子がまた通訳だ。私にバンザイをやれというのである。慎子に、「日本では景気をつけるときにどんなかけ声をかけるの?」と、他の選手が質問した時、慎子は「バンザイって言うんだよ」と解説したらしい。本当は、バンザイは最後のしめくりで行うパフォーマンスなのだが、最初に慎子からそう聞かされているエバンズビル大学の選手たちは、それが日本式の出陣の合図だと思い込んでしまっているらしい。少し照れくさかったが、選手たちが組んだスクラムの中で、「LADY ACES（＝エバンズビル大学の愛称）バンザイ!」と、私はやった。選手たちは、私のかけ声のあと「BANZAAA A I」と叫びながら、スタジアムに続く通路を猛烈な勢いで走り去っていった。私はちよっぴりリンカーンやワシントンと同格になったような気分になった。

その日の試合は、長いシーズンの疲れがドツと出たような重い動きで、エバンズビル大学は負けた。首位陥落と、残り三試合の展望に暗い影を落とした試合だったので、私たちはコーチも慎子もそっとしておいてやりたいと思い、敢えて接触を避けた。ところが慎子は、ロッカールームで着替えた後、観覧席に上って来て男子の試合を観戦している私たちを探したらしい。が、慎子が聞かされていた私たちの座席番号と、私たちが実際に座っていた座席番号とが食い違っていて探し出すことができず、慎子は仕方なく寮に帰った。そいついつわけでその口もとついでに慎子とゆっくり話すことができないまま終わった。

翌十八日、私たちはインディアナポリスにペイサーズと76ERSの試合を見に行くことになっていたので慎子とは会えない。その次の十九日の昼過ぎにインディアナポリスから帰って来て、夕方ようやく慎子と会うことができた。その日の夕食はオー・チャーリーズというレストランでステーキを食べた。話したいことは山ほどある。特に雅子と慎子はそうだろう。私はおそろおそろ慎子に聞いてみた。

「寮って他人を泊めたらまずいんだろ?」

「原則はそうですけど、親が来た時などみんな泊まったりしてますよ」

「え?じゃ、雅子泊められるのかい?」

慎子と雅子は顔を見合わせてニヤツと笑った。

「実は先生にそのことを頼もうかなあって二人で話してたんです」

「なあんだ、じゃ雅子のホテルの部屋は今日と明日キャンセルだ」

そういう話がまとまり、食事の後、雅子の荷物をホテルに取りに帰って、再び私は慎子と雅子を寮までクルマで送った。エバンスビルではレンタカーを借りて動き回ったので移動はまったく自由なのである。寮に戻った慎子は、再びトレーニングウエアに着替えて出てきて私と雅子をジムに案内した。私は夜の八時過ぎ、慎子がトレーニングウエア姿で出てきたこと自体に驚いた。今はシーズン真っ盛り。練習、試合、勉強、と息つく暇もない。「少しでも身体を休める時間が欲しいはずなのになぜ?」私はそう思った。しかしその答えはすぐにわかった。慎子は、ジムとその仲間たちを私たちに見せたかったのである。慎子は何も言わなかった。でも「私はここで一年間英語の勉強をしながらバスケットをしたんです」と、慎子は言いたかったのだ。そして「この仲間たちに支えられて毎日をつないで来たんです」とも言いたかったのだ。だから、私たちと初めてゆっくり食事をしながら話ってきたその日、私たちを真っ先に案内したのが、校舎でも寮でもなく、スチューデントフィットネスセンター(=ジム)だったのである。

やがて慎子は、スウェットを脱いで短パンになり、みんなに混じってバスケットボールを始めた。五対五の試合形式だ。慎子以外は全員男の子。中にウイリー(正式にはウイリアム)という、とてもスポーツが得意なようには見えない男の子がいる。これがロバーツで私に挨拶に来た男の子だ。彼は慎子より二つ年下の一年生。慎子の大ファンで、慎子に気に入られたためにこのジムに顔を出すようになり、ずぶの素人で、運動神経もさほど優秀ではないのにバスケットをやり始めたのだ。その日は、無二の親友の雅子が慎子の部屋に泊めてもらうことになっている。だから慎子は、いつもより少し早く切り上げて寮に戻る用意を始めた。ところが、少し遅れてジムに姿を現したウイリーがそれでは収まらない。

「慎子、もう帰るの?」

「そうよ」

「もう少しいてくれよ。僕のシュートがひとつ決まるまでさあ」

「わかった、ウイリー、そうするわ」

「よーし、がんばるぞ」

ところがウイリーのシュートは全然入らない。ウイリーがシュートをしようとする、相手の選手はわざとブロックショットを空振りしてやっているのにそれでも落とす。そこで、相手側のキャプテン風のジョークだ。慎子の話によれば、そのキャプテン格の彼は今三年生で超秀才だという。その秀才は、「今日は慎子の友達が来てるから早く帰してやるよ」とユーモアを交えて気を配ったのである。ウイリーはそのボールを拾ってドリブルで進み、レイアップシュートに持ち込んだ。しかし、そんな八百長をしてもらったのにウイリーはそのシュートを落とす。みんなドツとコートに崩れて笑い転げた。

私は、そんな遊び感覚のバスケットボールをほぼ一時間くらい眺めながら、時にはゲラゲラ笑ったりしたが、もう少しで涙が出そうな場面がしばしばあった。明るく、健康的で健気な寮の仲間たち。その大事な仲間たちとの大切な時間をすごすために、ジムに顔を出す慎子。しかも、疲れているけど仕方がないとか、お世話になったんだから恩返しするんだというよつな堅苦しい様子はまったくくない。本当に、その仲間たちと過ごす時間が楽しいと思いつながらボールを追っているようにしか見えない慎子。慎子は本当にすばらしい仲間たちに支えられていた。

ステーキを食べた日。私は慎子に言った。

「ずいぶんみんな疲れているようだなあ」

「自分でもだんだん足が動かなくなってきたのがわかるんです。でもそれが、練習しすぎが原因なのか、練習が足りないのが原因なのか、或いは考えすぎなのか、わからないんです」

二二日の大事な試合に負けた日。翌日は朝早く私たちが日本へ発つので、慎子は疲れているにもかかわらず、ロバーツに残って私たちと一緒に男子の試合を見てくれた。慎子はその時私に質問をした。

「先生、一つだけ質問があるんですけど」

「なんだい」

「私、後半になると足のつま先がしびれてくるんですよ。何が足りないんでしょうかねえ」

「ウーン、食事だとするとカリウムなどのミネラル類かなあ」

「カリウムって何に含まれています？」

「野菜だよ」

「野菜かあ」

「ピザとかハンバーガーばかりじゃだめだよ」

「…」

「それに貧血も心配だなあ。高校一年生の時の前科があるからねえ慎子は」

「…」

「一度血液検査してもらった方がいいんじゃないか？」

それでも慎子は、明日か明後日の夜は、また、ジムに行つて仲間と遊ぶのだろう。スチューデントフットネスセンターは、慎子にとつても大切な場所であり、そこに集まる学生たちは、慎子にとつても大切な仲間なのである。ウイリーが、慎子に替わってもらいたくてまたジムにやってくる。そんなウイリーに笑顔で応えるために慎子もまたジムに顔を出す。ここは、慎子の命の泉が湧いてくる場所なのである。

三 MISSOURI VALLEY

全米大学体育協会（NCAA）の仕組みについて少し説明しておこう。アメリカの大学スポーツはすべてNCAAという組織の傘下で活動している。そしてそれは、ディビジョン・・というランクに分けられている。それは、日本の大学の部・部・部のように、強い順に並べられたランクと見なしてもよいのだが、それは結果的に強い順になっているだけで、実は強い順にランクづけされているのではない。条件の違いによって分けられているのである。詳しいことまではわからないが、もっともはっきりしている違いが、奨学金で募集できる選手の数に制限を加えられていることである。

ディビジョンのチームは、十五名の選手を奨学金選手として募集できる。部員数に制限はないが、どのチームも、ほぼ十二から十五人ぐらいの部員で構成されている。日本の大学のように、五〇人も六

○人も部員がいて、同じチームで 群から 群まで分けられるようなチームはない。

デイビジョン のチームは、一〇名までの選手を奨学金選手で抱えられるが、他の選手は、もし部活動をやりたければ、自分で学費を払って活動しなければならぬ。

デイビジョン のチームは全員学費を自分で払う選手で構成されている。

このように、活動条件の違いによって分けられているので、例えばデイビジョン でビリになったからといって、デイビジョン のトップのチームと入れ替え戦をするようなことはないのである。それではどうやってデイビジョン とかデイビジョン とかにランクづけされるのかというと、それは大学側がNCAAに申請して認めてもらうのである。それも、申請すればすぐに認めてもらえるわけではなく、活動資金としての財力が大学側にあるかどうか、それに見合う施設を持っているかどうか、観客動員が見込めるかどうかなど、さまざまな角度で審査される。

審査に通れば、与えられた条件を守ってチームとしての活動をしなければならないが、選手個人に対してもさまざまな条件がある。例えば学業成績不振者は、奨学金も停止されるし試合にも出場できなくなる場合がある。また、選手の健康管理のためのメディカルチェックはとても厳しく、ドクターからストップをかけられた選手を出場させるとペナルティが与えられるなどの措置がとられる。

そのデイビジョンがまたカンファレンス(地区)に分かれるのだが、デイビジョン は全米三三のカンファレンスに分かれている。ひとつのカンファレンスにはおおむね八から十二ぐらいのチームが所属しており、その中で総当たり二試合ずつのリーグ戦を行って順位を決めるのである。カンファレンスはどのようにして決められるのかよくわからないが、エバンスビル大学が所属しているカンファレンスはミズーリバレーカンファレンスといって、インディアナ・イリノイ・アイオワ・ミズーリ・カンサスの五州にまたがる地域の一〇チームで構成されている。(一頁の地図参照)

しかし、インディアナ州にあるチームは全部ミズーリバレーカンファレンスに所属しているのかというとそうではなく、あの有名なインディアナ大学はビッグテンと呼ばれるカンファレンスに所属しており、そこにはミシガン大学やウイスコンシン大学等も所属している。ただ、西の端の大学と東の端の大学が同じカンファレンスで活動することはなく、近隣の州でまとまって構成しているのは間違いないようである。また、男女両方のチームがある大学は、必ず男女とも同じカンファレンスに所属している。

当然、日本の関東リーグと九州リーグでは関東リーグの方がレベルが高いのと同じように、カンファレンスによっても強弱があり、ビッグテンやACCなどのように、同じカンファレンスからNCAAトーナメント(全米から推薦された強豪ばかりのトーナメント試合)のファイナルフォー(ベスト四)に二チームも出場するようなカンファレンスがあるかと思えば、毎年カンファレンスチャンピオンになったチームがひとつだけNCAAトーナメントに出場し、しかも毎年一回戦で敗退するという弱小カンファレンスもある。

NCAAトーナメントの出場枠の話が出たのでここで話しておこう。テレビでアメリカのカレッジバスケットの試合をご覧になったことのある方は、名前の左に# とか# という数字がついているチームがあるのにお気付きだろう。あれは、その時点でのランキングを表している数字である。ランキングは全米すべてのチームにつけられているが、通常、名前の左に数字がつくのは二五位までで、それより下位のチームにはつかない。二五位までのチームはトップランキングのチームといって、全米でも一目置かれる強豪チームである。これらのチームの試合は、観客数もテレビ放映回数も他と全然違う。

そのランキングはどこでどうやって決められているかというと、経験と見識のあるコーチたち四十人が委嘱されており、彼らが情報を分析して投票する票によって、毎週のランキングが発表されるといふ仕組みになっている。アメリカは広すぎるので、全チームが試合をして順位を決めることができないか

ら、このような方法でランキングが発表されるのである。それが実によく当たるから、四〇人のコーチというのはほとんどないバスケット通なのだろう。よく当たるといのは、カンファレンストーナメントが終わってよいよNCAAトーナメントになり、ベスト十六からベスト八あたりになってくると、ほとんどランキングの数字が一桁のチームで占められているということである。

このようなランキングは、カンファレンスリーグの途中経過が四勝五敗であっても、対戦チームに強豪がひしめくビッグテンのようなカンファレンスならランキング上位に投票されるし、一方、強豪があまりいないようなカンファレンスになると、一〇勝〇敗で首位を突っ走っていてもランキングは低いという場合がある。

では、ランキングがどこで効力を発揮してくるかという点、それはNCAAトーナメントの出場権があるかないかという問題が生じた時である。NCAAトーナメントというのは全米から選ばれた六四チームで争われる。その出場チームの選定だが、まずカンファレンストーナメントで優勝したチームは必ず出場できることになっている。それは、強豪ひしめくカンファレンスであるが、弱いチームが集まったカンファレンスであろうが区別はない。すると、カンファレンスは全部で三十三あるから、それですべて三三チームが決定する。残る三三チームの推薦にかかるかどうか、カンファレンスリーグ戦終了時にランキングが何位だったかなのである。当然ランキングの高い順に推薦されるから、カンファレンスリーグで少しでも勝ち星を多くしてランキングをあげようと、どのチームも努力するのである。

カンファレンスリーグ終了時のランキングは、リーグ内の対戦成績だけではなく、リーグが始まる前に数試合行う、オーバーカンファレンス(他のカンファレンスのチームとの試合)のプレシーズンマッチ(カンファレンスのリーグ戦に突入する前に行われる対抗試合)で、強豪チームを破ったりするとグッとランキングが上がる。特に弱いチームが集まっているカンファレンスに所属していてランキング上位を狙いたいチームは、リーグ内でいくらか勝ち星を重ねても評価されないから、プレシーズンマッチの対戦相手に強豪チームを選び出して挑戦するというケースもある。

プレシーズンマッチの対戦相手というのは、カンファレンスやNCAAが決めたスケジュールで行うのではなく、お互いのコーチの話し合いで決めたり、恒例のトーナメント試合に招待されたりして決まる。どのチームと試合をするか、或いはトーナメントに招待されるかはそれぞれのコーチや主催者の思惑と駆け引きがあり、なかなかすんなりとはいかない。勝ち星を増やすために弱いチームばかり選んでも、ランキングを上げるのに何の役にも立たないし、また、一攫千金を狙って強豪チームばかりに挑戦し過ぎ、逆に黒星を並べるようになっては虻蜂取らずだから、そのかねあいが実に難しいのである。

アメリカの大学スポーツは、弱いチームはカンファレンスゲームが終了する二月下旬にシーズンを終えるが、さらにNCAAトーナメントに出場するような強豪チームは、それから約一ヶ月後の三月下旬にシーズンを終了し、あとは九月一日の練習解禁日まではチームとしてまとまって練習をしてはならない。もしそれに違反するとペナルティで前述のような処分を受ける。かといって選手たちはブラブラしているわけではなく、その間にケガの回復や個人的な身体の調整と強化に時間を割く。時には近隣の大学生が誘い合って集まり、スクリメージ(試合形式練習)をやる場合もある。あるいは他のスポーツで汗を流したりもする。とにかく、しっかりと自己管理をしてシーズン開幕に備えるのである。

シーズンは九月に始まるが、コーチと選手たちが全員一堂に会して練習できるのは一〇月十六日である。それから約四週間後によいよ公式戦が始まる。どのチームも開幕の二試合ぐらいはエキジビションマッチ(招待試合)で、以前から交渉しておいた外国のチームと招待試合を行ったりする。エキジビションマッチはチームのデータには関係のないお祭り試合のようなものである。それからだいたい八試合から一〇試合のプレシーズンマッチを消化して、よいよカンファレンスリーグに突入するのである。カ

ンファレンスリーグは同じチームと、ホーム（地元のスタジアムでの試合）とアウェイ（相手のチームのホームコートでの試合）で一試合づつ計二試合戦う。エバンスビル大学が所属するミズーリバレーカンファレンスは一〇チームで構成されているから、全チームがリーグ戦を戦い終えた時点で一位から一〇位までの順位がつく。その時点でチームの表彰も個人の表彰も行われるが、そのリーグ戦が終わったあと今度は一位から八位までのチームでトーナメント戦を行う。それでまたトーナメントチャンピオンを決めるのである。

私が慎子の応援に駆けつけた一九九九年二月十七日の時点で、エバンスビル大学は十一勝三敗でカンファレンスの首位を走っていた。エバンスビル大学はそれまで四年連続カンファレンス最下位をキープしており、しかもその負けっぷりがすごかった。四年前が二勝十六敗、次の年も二勝十六敗、その次もまた二勝十六敗、昨年は一勝十七敗である。カンファレンストーナメントは、上位八チームしか出場できないから、エバンスビル大学はこの四年間もちろん出場したことがない。

四年前、エバンスビル大学はディビジョン からディビジョン に昇格したが、チームはこのように負けっぱなし。そこで業を煮やした学校側がヘッドコーチを解任し、前年ディビジョン でチームをNCAAチャンピオンに導いたキャシーをスカウトしたのである。キャシーは、ディビジョン のコーチは大変だということを知っているからずいぶん迷った。が、「どうせやるなら最後はディビジョン で」と思う気持ちは、アメリカのコーチなら誰でも同じで結局彼女はOKした。それが今年で三年目。彼女が本格的にリクルートした選手が二年生になり、次のリクルートで慎子たちが入学した。キャシーにとってもここで真価を發揮しなければならぬと思って突入したシーズンである。キャシーは慎子の存在をテレビのインタビュアーで次のように答えている。

「慎子は決して勝負をあきらめないわ。私は慎子の人間的な完全さ（キャシーはその時 Completeness という表現を使った）が大好きだわ」

キャシーは今のチームのことを次のように考えていたに違いない。

「少しは素質のある選手を獲得することができたけれども、四年間もビリを続けているチームだから、選手たちは『頑張る』とか『粘る』というのがどういふことなのか具体的にはわかっていないと思うのだから今のチームには慎子みたいな選手が絶対必要なのよ」

慎子は、ロバーツで男子の試合を見ながらいろいろ話していた時、私にこんなことを言った。

「コーチベネットは先生にそっくりなんですよ」

「アメリカではあまりないらしいんですけど、これまで二回『出て行けコール』があっただんですよ」出て行けコールとは、こっちのことはに直せば、

「お前みたいにやる気のない選手はいらない！今すぐ体育館から出て行け！」

と、こんなところだろう。しかし、慎子がそっくりと言ったのはそんな場面ではなく、考え方とか取り組む姿勢のことを言いたかったはずだから、誤解しないように読んでいただきたい。

そして慎子は次のように付け加えた。

「そのうちの二回ともA選手なんですよ」

「たぶん先生がエバンスビル大学のコーチだったら、やっぱりA選手を真っ先に叩き出しますよ」

これからの話の本題である。

「でもですね、A選手は『私はがんばってます！（I'm trying!）』って言い返すんですよ」

「おまえはどっつ思うの？」

「コーチベネットが正しいと思います」

「そっかい」

慎子は厳しさとはどういうものかという考え方が身に染みついていて選手である。自分は頑張っているのか、まだ余裕があるのか区別がつかないような選手が集まっているチームには、慎子のような存在が絶対に必要だと思うキャシーの気持ちは痛いほどわかる。そういえば、日本の国内でもいつのまにか、大野慎子といえば「あの阿修羅像みたいな選手ですね」とか、「あの牛若丸みたいなヤツでしょ」というたとえで呼ばれるようになっていたのを思い出す。

さて、私が慎子の公式戦を初めて見た日は前述のように負けた。選手は疲れ切っていた。と同時に、私は試合を見ながら、「勢いでここまで来たけど選手たちは、本当にキャシーが何を求めているかわかってはいないな」とも思ったし、「残る三試合は全敗の可能性が強いな」とも思った。

次の試合は二三日。四日間空いたけど選手の動きは回復していない。そしてやはり負けた。そのあと男子の試合を見ながらの感想戦で、慎子と私は前述のような会話をしたのである。私たちが帰国したあと二試合消化したがそれもすべて負け、結局十一勝七敗の四位という成績でリーグ戦を終了した。しかし、昨年まで四年連続最下位だったのが一気に四位に浮上したのである。途中まで優勝争いに参加していながら失速したのは残念だが上々の出来だ。その結果、チームを大躍進させたという功績を認められて、キャシーはMVCカンファレンスの年間最優秀コーチとして表彰され、慎子はその原動力として活躍した功績を認められて最優秀新人賞を貰った。

私もガイさんも、「今年はカンファレンストーナメントになんとか出場してくれればいい」と思っていたのが本音だった。昨年まで四年連続ビリを続け、しかも毎年一勝か二勝しかしていないチームが、そんなに急に強くなるわけがない。だから、せめて八位以内には入って欲しいとささやかな願いを持って私たちはエバンズビル大学を見守っていたのである。私はインターネットで慎子の情報を得ていたが、ガイさんからの電話の方がニュースが早い。インターネットでは試合が終わった翌日にしか情報を入力することができないが、ガイさんは国際電話をかけたリEメール通信で慎子情報やキャシー情報をキャッチするからほとんど速報に近いのである。それをガイさんは私に逐一報告してくる。

「ハイ！コーチ。カッタヨ！」

「エーッ！すごい！」

「スゴイネエ」

エバンズビル大学が勝つ度に二人の口からそのことが飛び出す。エバンズビル大学は、カンファレンスリーグに入ってから初戦を失っただけであとは十一連勝。破竹の快進撃である。昨年とはまったく違う。私とガイさんの口から出ることは、情報を得る度に「スゴイ」と「シンジラレナイ」の連発だった。

実はガイさんも私も、慎子のことに関しては少し心配があった。慎子は、キャシーが欲している精神的支柱になることには充分応えてくれるだろうが、プレイ上でどこまで通じるかというのはまったく見当がつかなかったのである。確かに日本の女子選手のスリーポイントが世界で通用するレベルだと私は思う。しかし、試合はシューティングだけでなくリバウンドもあればディフェンスもある。慎子のもっとも大きなハンデイは身長だ。きつとそれでチームの足を引っ張る場面が出てくるだろうが、それを補うに足るプレイを慎子が身につけられるだろうか。そんな思いが始終私の頭の中を占領していた。

ガイさんもその思いは同じで、慎子情報ではいつも出場時間を気にしていた。得点やリバウンドは少なくて、出場時間が長いということはゲーム運営上欠くことができない選手であるということの意味している。慎子の出場時間はほとんど三五分以上だった。フル出場に近い時間である。もちろんチームでもっとも出場時間が長い選手だ。ということは、慎子は精神的支柱としての働きだけではなく、プレイ上で重要な選手なのだ。

試合の数が進んでいくうちに個人の記録もはつきりしてきた。慎子はアシスト部門で首位、ステイール部門で二位、スリーポイント成功数で五位、スリーポイント成功率で六位等と、ガードとしての重要な部門でほとんどベストテン入りをしている。しかし、慎子の試合ぶりは私たちには想像の世界ではない。慎子の試合ぶりを見たたくてやきもきしているところへ、コーチBからビデオテープと手紙が送られてきた。私とガイさんはその夜まばたきもせずそのビデオを見た。なるほど慎子はすごい。ほんの少しでも隙があればシュートを打とうとしているし、相手のボールを奪おうとしている。それも、小さいから悠々と構えている暇はない。落としたシュートをまた自分で拾ってシュートできるチャンスはゼロだ。一瞬の隙をついてシュートを放ち、しかもリングに沈める確率が高くなければならない。それには一瞬の迷いも怯みも許されない。それを四十分間慎子はやり通しているのである。

ビデオテープの中にコーチBからの手紙が入っていた。それを紹介しよう。

開幕当初のカンファレンスゲームのビデオを数本コピーしたので送ります。

サウスウエストミズーリスティート大戦は最初のカンファレンスゲームです。サウスウエストミズーリスティート大は全米二五位にランクされている強豪チームです。その強豪チームに私たちは最後の最後まで食らいつきました。でも、後半終了のブザーと同時に、ジャッキー・スタイルス（背番号十番、昨シーズン全米得点王）が放った超ロングシュートが決まって私たちは負けました。しかし、負けたはしたものの、この試合は私たちに大きな自信を持たせてくれました。

インディアナステイト大戦は最初のロード（敵地での）ゲームです。慎子はこの試合の終了間際に五反則退場になってしまいました。しかし、私たちはなんとかボールをコントロールして、僅差ながら勝利をものにすることができました。インディアナステイト大は、私たちにとって大変なライバルチームです。なぜなら、インディアナステイト大は私たちの大学からクルマでわずか二時間の距離にある大学で、リクルートでしょっちゅうかち合うチームだからです。

サザンイリノイ大との試合は先週の土曜日に行われました。私たちはこの試合に勝ったことによってカンファレンス単独首位に躍り出ました。この試合での慎子は完璧でした。四十分のフル出場でターンオーバー（ミスプレイ）がたったの二つだったのです。チームとしてもこの試合は最高の出来で、トータルターンオーバーがわずか八つでした。

さて、私はずっと慎子のことでお礼を言いたかったのですが、ようやくそのチャンスを得ました。ガイさん、私の人生に慎子をもたらしてくれて本当にありがとう。私は慎子が私自身の生活をどれほど素晴らしいものにしてくれたかということ、うまく伝えることができません。

私は彼女をコーチすることが毎日楽しくてたまりません。彼女は自分が素晴らしいプレイをした日です。私も、「うまくなるために私は何をしたらいいですか」と私に質問します。そして、自発的に居残り練習をします。彼女の存在はアメリカの選手たちに大きな影響を与えています。

まだ遠い先の話ですが、私は四年後に慎子が私たちのもとを去って行くんだということを考えたくありません。彼女はそれほど素晴らしい選手です。私は、慎子が卒業する時には、エバンスビル大学バスケットボールチームの歴史に残る偉大な選手として名を残すことは間違いないと思っています。そんなにすごい選手ですが、やっぱり四年後に別れる日が来てしまうのです。

でも私はちゃんとわかっています。何が起ころうとも慎子と過ごす一瞬一瞬を大事にし、また慎子をコーチする一瞬一瞬を楽しんでいかなければならないことを…。

トウリシア・ベトウザー

ビデオを見終わったあとでガイさんは私に告白した。

「コーチ、ジツハネ、ボクハネ、シンコノホケンカケテイタ」

'98 ~ '99										'97 ~ '98			
日付	時間	対戦相手	場	場	勝/負	点数	大野慎子	順位	勝/負	点数	観客		
Nov. 5	7:00pm	SaintLouis Goldstar	Ex	Home	W	86-42							
Nov. 10	7:00pm	AustriaAlmliesISports	Ex	Home	W	92-42							
Nov. 13	7:00pm	TennesseeMartin		Away	L	71-77		W	80-70				
Nov. 18	7:00pm	Murray State		Home	W	69-57		W	62-45				
Nov. 22	4:00pm	Belmont		Home	W	92-59		W	77-68				
Nov. 24	7:00pm	EasternIllinois(Carson)		Home	W	80-60		W	58-44				
Dec. 3	6:30pm	Indiana		Away	L	73-77			63-79				
Dec. 12	2:00pm	Valparaiso		Home	W	71-51		L	64-74				
Dec. 19	4:30pm	Illinois-Chicago		Away	W	68-44							
Dec. 23	5:15pm	SaintLouis		Away	L	63-80							
Dec. 29	7:00pm	SouthwestMissouriState	MVC	Home	L	72-75	2nd	L	60-73		376		
Jan. 2	7:00pm	Illinois State	MVC	Away	W	77-71	6th	L	60-73		1044		
Jan. 4	6:00pm	IndianaState	MVC	Away	W	64-60	4th	L	59-65		481		
Jan. 7	4:30pm	Bradley	MVC	Home	W	72-71	9th	W	79-63		453		
Jan. 9	2:00pm	WichitaState	MVC	Home	W	71-58	5th	L	77-88		205		
Jan. 16	2:00pm	Southern Illinois	MVC	Home	W	73-53	8th	L	68-72		261		
Jan. 21	7:05pm	Creighton	MVC	Away	W	75-54	3rd	L	64-81		1002		
Jan. 28	7:00pm	Illinois State	MVC	Home	W	88-60	6th	L	66-71		726		
Jan. 30	2:00pm	IndianaState	MVC	Home	W	75-62	週間M.V.P	4th	L	61-70	656		
Feb. 4	7:05pm	Bradley	MVC	Away	W	80-64	9th	L	69-84		492		
Feb. 6	3:35pm	Northern Iowa	MVC	Away	L	54-58	7th	L	69-80		628		
Feb. 8	7:05pm	Drake	MVC	Away	L	61-63	1st	L	71-90		2970		
Feb. 11	7:00pm	Northern Iowa	MVC	Home	W	60-57	7th	L	60-63		282		
Feb. 13	4:00pm	Southern Illinois	MVC	Away	W	57-53	8th	L	52-73		345		
Feb. 17	4:30pm	Drake	MVC	Home	L	62-73	1st	L	71-90		205		
Feb. 22	4:30pm	Creighton	MVC	Home	L	57-62	3rd	OTL	77-79		403		
Feb. 25	7:05pm	SouthwestMissouriState	MVC	Away	L	67-77	2nd	L	59-89		8303		
Feb. 27	7:00pm	WichitaState	MVC	Away	L	72-82	5th	L	58-60		383		

2月28日 カンファレンスリ - グ 4位で終了
 3月 3日 コ - チ キャシ - ベネット 最優秀コ - チで表彰される。

- 大野 慎子 最優秀新人賞を受賞。
- 大野 慎子 Honorable-MentionSelectionsの5人に選ばれる。
- 大野 慎子 All-FreshmanTeamの5人に選ばれる。
- 大野 慎子 アシスト.....第4位 1試合平均4.27
- 大野 慎子 ステイ - ル.....第7位 1試合平均1.96
- 大野 慎子 3点シュ - ト成功率.....第5位 37%
- 大野 慎子 3点シュ - ト成功.....第6位 1試合平均1.81

ミズ - リバレ - カンファレンス - ナメント (デ・モインズ = アイオワ州)

'98 ~ '99										備 考
日付	時間	対戦相手	場	場	勝/負	点数	大野慎子			
Mar. 4	7:00pm	WichitaState	MVC	Iowa	W	63-43	40分 13得点			エバンズビル大優勝
Mar. 5	7:05pm	SouthwestMissouriState	MVC	Iowa	W	59-55	39分 2得点			大野慎子ベストファ
Mar. 6	7:00pm	Creighton	MVC	Iowa	W	75-72	43分 (僅差) 13点			イブに選ばれる

NCAAト - ナメント (バトン・ル - ジュ = ルイジアナ州)

'98 ~ '99										備 考
日付	時間	対戦相手	地	場	勝/負	点数	大野慎子			
Mar. 13	8:30pm	LouisianaState	NCAA	Louisiana	L	69-78	40分 13点			

保険?私は何のことかよくわからなかったが、よく説明を聞くと保険というのはお金のことでなく、慎子の進路のことだとわかった。

ガイさんの話によれば、もし慎子がアメリカのディビジョン で通用しなかったら、せつかく勉強したことが台無しになる。そこでもディビジョン で駄目だったらディビジョン のويسconsin大学リバーフォールズ校に転校できるよう、コーチデイブ(以下デイブと呼ぶ)に密かに頼んでいたというのである。もちろん、学費や生活費はできるだけかからないように考慮したうえでだ。デイブは「それは喜んで引き受けるよ」と快く承諾してくれたけどすぐ、「でも、慎子はディビジョン で大丈夫だよ」と言ったそうである。たぶん、キャシーもデイブも、慎子は精神的支柱としてだけでなく、プレイでもディビジョン で充分通用すると見抜いていたのだろう。

ともあれ、私たちのそんな心配を次々と消しながらエバンズビル大学と慎子は快進撃を続けた。結果は四位に終わったが昨年と比べれば大躍進だ。しかもキャシーは最優秀コーチで表彰され、慎子は最優秀新人賞を貰った。私はこのニュースを聞いた時、「すごい」以外のことは浮かばなかった。

しかし、驚くことはまだある。それから一週間休養して臨んだカンファレンストーナメントで、エバンズビル大学は優勝してしまったのである。決勝戦の相手はクレイトン大学で、延長戦にもつれ込む大激戦だった。優勝したこともすごいが、準決勝で全米二位にランクされているサウスウェストミズーリストイト大学を破ったのがまたすごい。私はロバーツで二試合見て日本に帰り、「エバンズビル大学の選手たちにはもう残りを戦う集中力と体力は残っていない。選手たちは若いし、今年はいろいろ勉強をして来年につなげればいいよ」と思っていた。ところが、インターネットで調べるとエバンズビル大学はトーナメントの一回戦でウィチタステイト大学に勝っている。それも大差だ。そして次の日の準インターネットの新聞にキャシーのインタビュー記事が載っていたから紹介しよう。

「私たちは非常に疲れていました。タイムアウトの時にベンチに戻ってきた選手たちは『足がフラフラする (legs felt like noodles)』と言っていました。でも私たちはチーム一丸となってがんばりました。選手たちは素晴らしい精神力を発揮してくれたと思います」

決勝戦の相手はクレイトン大学。二月に私がエバンスビルに試合を見に行った時、ホームゲームなのに完璧にやられた相手だ。カンファレンストーナメントの決勝戦だけは、インターネットで5分おきに得点が表示されるから私はパソコンの前に釘付けになって画面を見つめていた。前半はずつと有利に進めている。が、前半の終わり頃から雲行きが怪しくなってきた。前半終了時点でのスコアは、三六対三五でエバンスビル大学がでかろうじてリードしたまま終わったが、ゲームの進行状況からすれば後半逆転されるのはインターネットの画面上でも明らかである。案の定、後半始まって五分で捕まり、少しの間だけ一進一退が続いたが、エバンスビル大学はすぐ逆転された。あとは数字の変化で見る限りエバンスビル大学が勝てそうな雰囲気ではない。ところがインターネットのスコアボードは最後の最後にエバンスビル大学に一点追加させ、次に「OVER TIME」という表示を出した。

何が起こったのかはわからないが、得点の追加され具合からすると、どうやら試合終了直前のフリースローの成功の差が勝敗を大きく分けたようである。結局、延長戦を制してエバンスビル大学が勝ち、トーナメントで優勝してしまった。この試合、慎子は四三分の出場で得点は十三点。チームの勝利に大きく貢献した。

私は二月末に、ロバーツで疲弊しきったエバンスビル大学の選手たちを目の前で見てきているから、この結果がどうしても信じられない。たった一週間の休養でどうしてそこまで回復するのか、しかもキャシーは選手を精神的に立ち直らせている。見事としかいいようがない。インターネットで調べたポツクススコアを見ると、カンファレンスリーグの時とスタメンの構成が変わっている。一年生四人と二年生一人の若いメンバーで戦っているのである。

慎子が、「先生がエバンスビル大のコーチなら真っ先にあの選手をコートから叩き出しますよ」言っていたA選手と、もう一人の二年生がスタメンからはずされ、代わりに新入生が二人入っていた。これはアメリカのバスケット界ではほとんどあり得ないことである。カンファレンストーナメントからNCAAトーナメントへとだんだんレベルが上がってくると、スタメンの中にフレッシュマンが多いチームは軽く見られる。いくら素質があっても若い選手たちでは厳しいトーナメントを乗り切れるはずがないというのである。アメリカのカレッジバスケットボールのトーナメントを勝ち上がっていくというのは、本当に人間が磨かれたチームでなければできないことなのだ。

それを承知でキャシーは、四人ものフレッシュマンをスターターに起用した。その場にいなかったのでも実感は湧かないが、ロバーツのミーティングルームで、「エイブラハム・リンカーン」「ジョージ・ワシントン」と、顔を真っ赤にして選手たちに演説していたキャシーの顔がまた思い出された。

慎子はまた、このトーナメントでの優勝戦のあと、ベストファイブに選ばれている。日本人の選手がアメリカのディビジョンで奨学金をもらいながらプレイするのでさえ初めてなのに、それに加えて新人王をもらい、さらにカンファレンストーナメントではベストファイブで表彰された。慎子がどれほどすごい働きをしたか、実際に見ることが出来なかったのが残念だが、慎子のすばらしさを賞賛すると同時に、私は敢えてまたここでアメリカの人たちの心の広さを強調したい。

新人王の候補に最終的に並んだのは三人。その中には慎子よりもアシストや得点などの記録上で上回っている選手がいた。それなら「ポツと出てきた東洋人に新人王を持っていかせるのはバスケットボール発祥の地アメリカの名折れだ」とかなんとか言っていて、他の二人のうちのどちらかに新人王をあげても何もおかしくない。それなのに場内アナウンスは、「フレッシュマン・オブ・ザ・イヤー シンコー・

オオノー」と、彼女の名を告げたのである。しかもカンファレンストーナメントのベストファイブという特別の副賞付きで。

アメリカの人たちが持っている「いいものはいい」と素直に認める心の広さ。それを本当にすばらしいと感じるのは私だけだろうか。

四 TOEFL

慎子のエバンズビル行きの話が具体的に進み始めたのは、一九九六年の夏頃だった。キャシーは前々から、「鶴鳴出身でコーチ山崎が推薦する選手ならば誰でもいい。必ず奨学金選手で採る」と言っていた。読者は、「どうして山崎先生とコーチベネットが知り合いになり、また、どういう経緯で大野がエバンズビル大学の選手になったのか、それを早く知りたい」と思っておられることだろう。それは必ず後で話す。この話はどうしても、慎子のエバンズビル大学デビュー物語から進めていかなければならないのである。少しの間辛抱して渡米前後の慎子物語を読んでいただきたい。

慎子が高校三年生の時、母親の美智子さんは大阪の岸和田に住んでいた。佐世保が故郷なのだがテナントとして入っていたビルが火災に遭い、経営していたスナックが続けていけなくなったので、知人の紹介で岸和田で働いていたのである。慎子は実業団からも声がかかっていたが進学希望だった。だから、当時岸和田から通うとなれば大阪体育大学を筆頭に、関西から東海あたりの体育系大学の進学を主な進学先と決めて考えていた。私もその線で動き、大阪体育大学の中大路先生には、「もし本人の気持ちが決まりましたらよろしくお願いします」と頼んであった。慎子が高校三年生の六月頃である。

当時、ガイさん(＝前述。私とキャシーの橋渡しをした重要人物で、詳しくは後述する)がしきりに「キャシーガネ カクメイノセンシユ トリタイツイッテル ダレカイキマセンカ」と言っていたが、最初のうちは私も本気にしていなかった。なんと言ってもバスケットボールの本場アメリカである。しかもそのデイビジョン に、日本のどこにでもいるような選手しかない鶴鳴高校のバスケットボール部からだれかが挑戦してみるなんて、どう考えてもそんな発想は浮かんでこないののである。

しかし、再三ガイさんは私に話を持ちかけてくる。そこで詳しく話を聞いてみることにした。いきさつはこうだった。キャシーは前述のごとく、三年前までウイスコンシン大学オシユコシユ校のヘッドコーチをしていた。その時私たちはキャシーのクリニックを受けるためにアメリカ遠征をしたのだが、その時以来キャシーは鶴鳴から選手を一人欲しいと思いつけていたようである。しかし彼女の大学はデイビジョン だ。デイビジョン というのは、すべて自分で学費を支払って学生となる選手で構成されるチームだから、鶴鳴から選手を採っても学費の支払いで苦労させる。そこで一般奨学生のための奨学金がどれだけ借りられるかとか、地元の基金の中には外国人学生のための奨学金制度があるが、それを利用するとどうなるかとか、いろいろ本気で考えていたようである。

ところが、キャシーは前述のようにNCAAデイビジョン の部で全勝優勝を果たした後、デイビジョン のエバンズビル大学へ移籍したので、今度は鶴鳴から選手を採っても学費で苦労させることはない。だから本当に真剣にキャシーは鶴鳴の選手の勧誘活動に乗り出したのである。ということ、私はキャシーが本当に本気で鶴鳴から選手を採りたいと思っていることを知った。そして私は大野慎子を推薦した。ガイさんはセンターの肘井あたりを考えていたようである。しかし私は、なぜ鶴鳴の選手にキャシーがこだわるのかをおおよそ察していたので、私なりの推薦基準で選手を絞り込んでいった。

キャシーが求めていたのはおそらく、鶴鳴の選手の精神的な強さとしたかさである。それに私は、自分なりの基準を加えて絞り込んでいったのである。まず、鶴鳴にかぎらず日本のセンターは少々大き

くてもアメリカでは通用しない。通用するならスリーポイントだ。理由は、日本の女子選手は両手でスリーポイントを打つ（アメリカでは両手でシュートを打つ選手は首をかしげられるのだが）ので距離が出せるからである。その点で絞り込めばキャプテンの工藤雅子と副キャプテンの大野慎子しかない。二人を比べれば精神的な強さはどちらも特級で、性格も賢さもシュート力もまったく互角だがひとつだけ慎子が雅子より優れているものがあつた。それは筋力である。二人とも身長は一六〇センチ。そんな選手がアメリカでやるのなら、少々の当たりあいになつてもはじき飛ばされない筋力が必要だ。そこで私は慎子に白羽の矢を立てたのである。

鶴鳴は年に二回、県立総合体育館のスポーツ科学課で医科学体力測定を行う。慎子たちのチームは小兵軍団だったので、特別に筋力トレーニングには工夫をこらしてチームを仕立てあげた。その結果、スタメン五人の筋力は一九九一年に全国優勝した時のチームの筋力を上回るようになっていた。その中でも慎子の筋力はずば抜けており、腹筋の強さを表す体幹屈筋力は、医科学測定の記録保持者で未だに破られていない。ここで慎子がエバンスビル大学に行くようになったいきさつをもう一度注意して読んで欲しいのだが、キャシーは最初から慎子を指名したのではない。鶴鳴の選手なら誰でもいいと言つたのである。そう言われて慎子を指名したのは私だ。それにはこのような経緯があつたのである。

さて、そんなわけで高校三年生のインターハイが終わつて二学期に入ったある日、私は慎子にこの話を持ちかけた。

「先生覚えてますか？この場所で、私がここで、先生はそこに立つていて…『キャシーが鶴鳴から一人欲しいんだって。しかしやれるのはお前しかない。どうだやってみないか』そう言つたんですよ」二年ぶりにアメリカから里帰りした時、慎子は体育館のバスケットコートのフリースローラインのところを私を引っ張つて行つてそう言つた。私は慎子に白羽の矢を立てたのは覚えているが、その場所で行つたということまでは覚えていない。でも慎子にとっては重大問題だつたからだろう。その時のことを再現するために、わざわざ私をその場所まで引っ張つていって説明してくれた。慎子は、自分にとつても大事にしていることのひとつである、自分の出発地点を再確認したかつたのかも知れない。

慎子はすぐこのことを三人に相談している。当時慎子にはなんでも相談できる相手が二人いた。一人はキャプテンの工藤雅子、もう一人は一年生の時の担任の田中亜紀先生である。田中先生は鶴鳴の卒業生で、国語の教師としてまた母校に帰ってきたばかりのピカピカの新任教師である。雅子や慎子と年も近かつたのでよき相談相手となり、二年三年と担任ははずれたものの、三人姉妹みたいにして卒業するまでつきあつていた。その田中先生と雅子に慎子は次のように自分の心を打ち明けている。

「私は英語が得意なわけでもないし…、アメリカに渡つて自分のバスケットが通用するかどうかもわからないし…、一年経つたら入学できるといふ保障は何もないし…」
そういう慎子に二人は「やつてごらんよ。やつてみなければわからないじゃない」と励ます。慎子は「他人事だと思つて…」と怒つたようにつぶやいた。しかし、この二人の励ましで慎子の心はおおいに揺らいだようである。

もう一人の相談相手はもちろん母親の美智子さんである。

「あなたはどつなの？」

「やつてみたい」

三姉妹の二人から励ましを受けて腹を決めていた慎子は母親にそう答えている。それから私のところに返事を持ってくるまでに二週間かかった。それは、入学さえすれば経費はすべて大学側が持つてくれるが、それまでの英語研修の期間は自費になる。それには約一五〇万円かかるが、それを捻出できるかということについて美智子さんが断を下すまでの期間だつたのである。

慎子は二週間後「がんばってみます」と私に告げた。それと相前後して美智子さんからも、「どんなことをしてでも一五〇万円は用意しますからよろしくお願いします」という電話があった。それから卒業するまでの五ヶ月間は目が回るほど忙しかった。まず、大きな全国大会が二つある。十月の国体と十二月の全国選抜大会である(このことについては詳しく後述する)。その間事務手続きがいろいろあるし、また、一応英会話の練習もやらなければならなかった。しかしそれはほとんど役に立たなかった。

そんなこんなであつという間に月日が経ち、一九九七年の三月一日に慎子は卒業した。そのあと、岸和田のお母さんと三年ぶりの親子水入らずの生活を楽しんだのはたったの二週間。慎子は三月十四日に関西空港発のノースウエスト機でひとりアメリカに旅立つて行った。

アメリカに着いた直後、デトロイトが吹雪で空港は閉鎖された。だからデトロイトからエバンスビルに向かう国内線の飛行機が飛ばない。ひと晩デトロイトのホテルで足止めされ、翌日ようやくエバンスビルに着く。その翌日さつそくオリエンテーション。そして翌々日の十七日が最初のTOEFLテストである。これは本人の語学力を見極めるためのテストで、その得点によってその後の授業のクラスを決めるのである。クラスが決まるとすぐ授業が始まるが、授業のスケジュールは月曜から木曜までは毎朝九時から五時限の授業。月曜と水曜は通常の授業に加えて午後六時からTOEFLの授業がある。普通の授業もTOEFLの授業も毎日宿題があるから寝るのはいつも夜中の二時とか三時になる。

TOEFLとはTESTING OF ENGLISH AS A FOREIGN LANGUAGEの頭文字を並べたもので、海外からの留学生が、アメリカの大学に入るためにクリアしなければならないテストのことである。クリアしなければならぬ得点はだいたい五〇〇点前後である。だいたいと言ったのは、定められている得点がそれぞれの大学で違っているからである。エバンスビル大学は五〇〇点。慎子のスタート時のTOEFL得点は三九〇点だった。三月十七日、アメリカの地を踏んで三日目に行われたテストの結果である。

慎子はバスケットボールだけではなく、学業成績も抜群に優秀な生徒ではあったが、中でも英語がずば抜けて優秀だったというわけではない。そして、高校入学時からアメリカ留学を目指して勉学に励んできたでもなく、高校三年の夏休み以降に決心をしたのだから留学の下準備はほとんどできていない。だから多分、この三九〇点という点数は、一般的な留学希望の学生の最初の得点としては低い得点だったはずだ。それが、その後もつと大変なことになるのである。

通常ならば試験というのは勉強を積み重ねれば次第に点数は上がっていくはずである。ところが慎子の場合、五月九日実施の二回目のテストでは三七〇点、八月十五日の三回目のテストで三五〇点と、アメリカで五ヶ月英語を学んだ結果テストの点数はだんだん下がっていった。慎子がスランプに陥ったのか、或いは最初の三九〇点はまぐれ当たりであつて、本当は三五〇点ぐらいが慎子の実力に見合う妥当な点数だったのか、それはわからない。この頃私の耳に入ってきた情報というのは「慎子の英語はまだまだらしい」という程度だった。その頃私は慎子に電話をかけている。

「大変みたいだなあ」

「はい」

「バスケットの練習も同じだよ。頑張っても頑張っても成果が上がらない時がある。でも、やり続けているうちにまた成果が上がる時が来る。訓練ってそんなもんさ。焦るなよ」

「はい」

私は慎子のTOEFLがそんなに大変なことになっていようとは夢にも思っていなかったし、電話での慎子の態度もそんなに深刻そうでもなかったたので、ほんの世間話のつもりでそんな話をした。ところが、その時の慎子の心中はおだやかではなかったたようである。二年ぶりの里帰りの時に慎子は初めてそ

の頃の心境を明かした。慎子はちょうどその頃、「一年半で合格しなければバスケットはできないけど、一年半では合格しそうにないな」と思い始めていた。だから、私の電話はナイスタイミングだったのである。慎子ははつきりと、「あの電話でまた気を取り直してやり始めることができました」と言った。

しかし、単身アメリカに渡ったものの、大好きなバスケットボールも満足にできず、起きてから寝るまで英語漬けで、しかもその英語がテストを受ける度に点数が下がっていくという状況。普通の学生が慎子と同じ立場に立たされたら、「オハイオ川に飛び込んで死んでしまおうか」とか、「もうどうだっていいから日本に帰ろう」となど泣き言を言い、挙げ句の果ては鬱病か何かになって多くの人に迷惑をかけているに違いない。しかし慎子はタフだった。相変わらず寝るのは深夜という生活を繰り返しながら少しずつ挽回し、TOEFLの点数をあげていった。その経緯は次のとおりである。

四回目 一九九七年 八月二日 三八七点

五回目 一九九七年一〇月十七日 四二〇点

六回目 一九九七年十二月十七日 四四三点

七回目 一九九八年 一月 九日 四五三点

八回目 一九九八年 三月 六日 四七三点

九回目 一九九八年 三月十六日 四五七点(少し疲れたのか安心したのか一旦下がった)

一〇回目 一九九八年 五月 七日 四六三点(少し戻したがまだ疲れはとれない?)

十一回目 一九九八年 五月十六日 五二〇点

慎子はさらに、TOEFLで見通しが立つようになると、奨学金を受けるにふさわしい学生であるかどうかのテストであるSAT(SCHOLASTIC APTITUDE TEST)も受け始めている。SATは英語と数学の二科目の合計が八二〇点を越えると合格である。そのシステムは、英語も数学も前回までの最高得点を生かして計算されるようになっていた。その経緯は次のとおりである。

一九九八年三月 英語二八〇点 数学四九〇点 合計七七〇点

一九九八年四月 英語三一〇点 数学四九〇点 合計八〇〇点

一九九八年五月 英語三二〇点 数学四六〇点 合計八一〇点(数学は前回得点四九〇が生きている)

一九九八年六月 英語二一〇点 数学五三〇点 合計八五〇点(英語は前回得点三二〇が生きている)

SATに合格したのは六月四日。関西空港を飛び立ってから一年二ヶ月と二週間。慎子は晴れてエバンスピル大学の学生になり、バスケットボール奨学金選手となった。その間、キャシーの思いがガイさん経由で私の耳に数回入ってきていた。

「慎子、なんとかして一月に間に合わないかしら。なんなら家庭教師をつけてやってもいいけど」

キャシーは翌シーズンまで待てないのである。弱小チームを強くするにはどうしても精神的な支柱が必要なのだ。しかし慎子は、英語の勉強をするだけで手一杯で、バスケットボールに集中する余裕がない。もし家庭教師をつけたり、何か特別の手だてで応援をしてTOEFLを急ピッチでクリアさせ、一月入学(正式な新学期は九月なのだが、アメリカの大学は一学期遅れの一月に入学して卒業も十二月卒業ということが可能なのだそうである)に間に合ったとしても、その後の学生生活にまったくゆとりを持たないだろう。一時はなんとかして間に合わせたかったキャシーだったが、慎子の生活を見ていてそのことに気づき、やがてあきらめた。

「いいわ、一年待つ。その方が慎子のためにもチームのためにも得策だとわかったわ」

慎子の役目は当然ポイントガード。そうなればコーチとのコミュニケーションは絶対不可欠。コート上のキャシーは超早口でまくしたてるので有名だ。彼女の英語を聞き取る力を身につけるためにはどうしても半年の語学研修では無理である。キャシーの選択は正しかった。

「ホームシックにはなりませんでした。私はアメリカが好きです。こっちの生活は苦になりません」慎子はそう言う。しかし、これは私の想像でしかないが、ホームシックになる暇さえなかったというのが本音ではないかと思っている。なぜなら、毎日寝るのは深夜の二時か三時である。授業がない金土日はとにかく寝ることになっているという生活だ。自分のことを考えてみる暇さえなかっただろう。

話を少し前に戻して、TOEFL・SAT合格までの、慎子の生活と精神的な状況の変化について話そう。三月十五日。エバンスビルに足を踏み入れたものの、他の学生たちとのコミュニケーションなど何もできない。もちろん慎子は焦った。最初のTOEFLでクラス分けがあり、さっそく授業が始まった。その授業の最初に自己紹介をしなければならぬが慎子はだまって立っただけである。

そんな慎子を見かねて助けてくれたのが韓国人とアラビア人の留学生であった。彼女たちは授業の中に組み込まれたフリートーキングの時間に慎子が喋ることを文章化し、そのマニユアルを慎子に渡してそのマニユアル通りに慎子に喋らせたのである。相手の質問に答えたり、仲間と会話をしたりするのはなく、相手を無視してマニユアルを読むのだからこれは会話ではなく朗読である。しかし、世の中にはいい人がたくさんいるものだ。慎子はこの時のことを笑い話風に聞かせてくれたが私は感動して笑えなかった。

困った時は日本人留学生がエバンスビルにも何人が居るわけだから、その人たちに聞いたりその人たちと会話をしたりすれば、いくらかはストレスの解消になる。しかしそれでは英語が進歩しないので、慎子は新しい友達と協力してある決心をした。その友達というのは韓国からと台湾からの留学生である。彼女たち三人は、絶対に英語だけで生活しようと誓い合った。しかし、どんなに努力しても意思が伝わらない時があるはずだ。三人はその時だけ漢字を書いて自分の意思を相手に伝えようと決めた。それが、英語学校に入ってから二ヶ月目。五月の中頃のことである。「この頃からですね、日常生活から日本語が消えたのは」慎子はそう言った。

しかしそうは言っても、TOEFLに合格することを目的とした英語の学習生活の中で日本語が消えただけで、アメリカ中どこを旅しても困らないという英語にはほど遠い。慎子は、「そうですねえ。日常の英語があまり困らないなあと感じたのは、それから一年後の五月中旬頃からですかねえ」と言った。それはなぜかというと、TOEFLに合格したのでチームメイトやコーチと直接接する機会が多くなったからだ。チームメイトと接するようになるとバスケットを通したいろんな話が出てくるようになる。会話が進む。アメリカ人と話をしていてはもう何も心配しない生活になっていった。ただ、慎子に言たのだろう。それからはもう会話についてはもう何も心配しない生活になっていった。ただ、慎子に言わせれば、英語を完璧にマスターしたのではなく、「わからなければ『アイ ドント ノー』と言えばいいんだから」と開き直ったのがよかったと言う。本音が冗談か「いつの間にか『アイ ドント ノー』が反射的に口から出るようになりましたよ。アハハハ」と慎子は笑い飛ばした。

しかしバスケットではトントン拍子とはいかない。とんとん拍子とはいかないというのは、本人が勝手に心配しているだけであって、慎子の技術や体力についてはもちろん、精神的な面でチームのリーダー格になると思っただけでコーチ陣は楽しみにしている。だから、コーチ陣はシーズンに入れば慎子は絶対スタメンで使うと決めているのだが、慎子自身がアメリカの学生のディビジョン の試合や練習がどんなものなのかまったく見当がつかないから余裕がないのである。

だから最初は、チームメイトのプレイを観察したり、自分のランクを査定したりする余裕はまったくなく、自分は何をしなければいけないのか、自分がやっていることはこれでいいのかと、戦々恐々として毎日コートに立つ日々が続いたという。

それもしかし、一〇月を過ぎて本格的なチーム練習になり、五対五のチームオフenseやチームディ

フェンスの練習が始まると必ず主力選手側のチームに入れられるようになったことで、ようやく慎子は自分は使ってもらえるんだとはつきり認識した。

慎子がこうしてアメリカで活躍しはじめた丁度その頃、地元長崎ではもう一人のヒロインが誕生しつつあった。その選手の名は藤永佳子。諫早高校駅伝チームのエースである。彼女は走るたびに自己記録を更新し、走るたびに人々の注目を浴びた。当然長崎県だけではなく日本全国にその名を知られるようになった。藤永のすばらしいところはさわやかさである。長距離と言えば「苦しい練習」「辛い競技」というイメージが拭えない時代が続いた。それを彼女は一扫した。彼女はいつも笑顔を浮かべて走り、そしてインタビュアーの後は「ありがとうございました」と笑顔であいさつをする。

おそらく、そこに登り詰めるまでには幾多の難関があったはずだろうに、この二人は辛さを克服したことなど微塵も感じさせない。この二人は日本のスポーツにつきまといていた悲壮感を爽快感に塗り替えた立役者だと私は思う。

五 OSHKOSH

慎子のアメリカ留学の話の発端は、一九九七年の一月中旬の出来事から話さなければならぬ。まずふたりの人物を紹介しよう。

GUY W HEALY氏 アメリカワシントン州出身一九五一年二月一〇日生

長崎在住十七年 四八才。

北 浩一郎 氏 鹿児島県出身一九六一年一月二〇日生

福岡在住 三八才

ふたりは共同で留学コーディネートの事務所を開いている。主な仕事内容は日本の学生たちをアメリカで語学研修させるためのプログラムと、アメリカから日本に研修に来る学生のプログラムを組むことである。ホームステイもあれば大学の施設を利用しての研修もある。アメリカの研修先はオレゴン州・ワシントン州・ウィスコンシン州・アイオワ州・インディアナ州にまたがる数校の大学である。

ふたりの仕事はこのような語学研修を主体としたプログラムだが、ガイさんはワシントン州にいた頃バスケットボールの選手だったし、大学を卒業した後ほんの少しの間だけドラブチームのコーチをしていたこともあるので、語学研修だけではなく、バスケットボール選手の日米交流を企画したいと思いつけていたらしい。ある日北さんから突然学校に電話がかかってきた。

「日米高校生バスケットボール親善交流を企画してるんですが…」

突然のことで最初は彼が何を言いたいのかわからなかったが、北さんが、日本のバスケットボール選手を連れてアメリカに研修に行かせるプログラムを計画しているが、乗ってこないかと誘いをかけてきたのだということだけは数分間の電話のやりとりで理解することができた。

しかし、北さんが言う「研修」というキーワードを、私はこの話が成立するまでほとんど自分本位の解釈をしていたことに気付かなかった。私はずっと、「研修」の意味を「バスケットボールの勉強」と解釈していたのである。それなら私の方が詳しい。何度もアメリカに行つて様々なコーチからバスケットの考え方を勉強し、多数のチームの練習や試合を見て勉強している。また日本にやってきたアメリカのコーチのクリニックを何度も受けたことがある。だから、選手一人につき二五万円ものお金を出してアメリカにバスケットの勉強をしに行くのなら、そのお金の半分でよいかから逆にアメリカから有名なコーチを一人呼んでクリニックを受ける方がよほど有益であると私は考えていた。

しかし、北さんたちの考えている「研修」というのは単にバスケットボールを勉強するという意味で

はなかった。本業としている語学研修でも、わざわざアメリカに連れて行かなくても英語をマスターするだけなら、日本国内でもっと上等のプログラムを使って勉強させる方法はいくらでもある。彼らが言う研修とは、現地の文化や人と接してそこから得るものも含めた研修のことなのである。バスケットボール通ぶっていた私は居丈高に経費の無駄を説き、アメリカのバスケットボールと日本のバスケットボールの違いを説明して、北さんたちのプログラムの幼稚さを指摘する態度をとり続けていた。

しかし北さんたちも日本の部活動とアメリカの部活動の違いの認識が薄く、最初は九州各県の高校から優秀選手をピックアップしてチームを編成し、アメリカに遠征ができないかという提案を持って九州の強豪校に話を持ちかけたがどこも断られ、鶴鳴にたどり着いたのである。この話を私に持ちかけて来た時、北さんたちはまだ九州各県から代表選手を集めたチームとアメリカの高校生を交流させたいと考えているようだった。それに対して私はアメリカの「個人主義」と日本の「組織優先主義」の違いと、アメリカのスポーツ界におけるオフシーズンというシステムが日本のスポーツ界にはないということの認識が欠けているから、その点を整理して練り直さなければこの企画は成立しないと指摘した。

それならどんなアイデアがよいかと尋ねるから、一番いいのは単独チームでツアー人数が確保できればそれが一番いいと答えた。それなら鶴鳴単独で行きませんかと北さんは詰め寄ってきた。私は北さんの気迫に押され、それではアンケートをとってみようということに選手にアンケートをとってみることにした。プログラムの内容はおおむね次のようなものであった。

一 期間 一九九五年八月九日―十八日

二 場所 アメリカ合衆国 Wisconsin オシユコシユ ウィスコンシン大学オシユコシユ校
三 内容 ウィスコンシン大学のコーチ キャシー・ベネットのクリニックを受ける

近郊の高校生のサマーキャンプであるオムロハイスクールトーナメントに参加する

シカゴ近辺の観光とショッピング

四 宿舎 ウィスコンシン大学オシユコシユ校の寮に泊まる

五 経費 一人当たり約二五万円

アンケートの結果は「行く」が七人、「わからない」が三人、「行かない」が二人であった。この結果を北さんに知らせたら非常にがっかりしていた。経費の話しをしておこう。近頃は旅行会社のパンフレットには一〇万円台で海外に行けるツアーがたくさんある。それと比べれば二五万円は確かに高い。しかし、クリニックの経費やトーナメント参加経費などを含めばそうなってしまつので、それは普通の観光旅行とは違うから仕方がない。というわけで、この時点でこの話は打ち切りになるところだった。

しかし北さんたちは粘る。経費だけの問題ならばアルバイトを斡旋するとかなんとか、とにかく粘る。私は、これだけ話を聞いてやり、それであるアンケートの結果が出たのだから、もうあきらめるだろうと思っていたが、北さんたちが粘るので、今度は保護者にもこの企画の内容を知らせる文書を配ってアンケートをとった。すると、選手対象のアンケート結果とはまったく異なり、「行かせたい」が三人で「経費捻出ができない」が四人だった。圧倒的に「行かせたい」が多い。選手たちだけのアンケートでは、選手が「こんなにお金がかかるのなら親はダメだと言つたろう」という気持ちから「行かない」と回答したのであって、親が考えていることとは大きくかけはなれていたらしい。「高いつて言わなかつた？」と私は選手に聞いた。すると選手は「普通の海外旅行はいつでも行けるけど、バスケットの間で行けるのは一生に一度かもしれないから行きなさいって言われました」と答えた。

こどもは親に遠慮して「無理だ」と思う。私も実は保護者への負担が大きいが気になり、この企画は無理だという先入観を持って考えていた。ところが親は「一生に一度しかないかもしれない」と思つてこどものためにお金を工面しようとするのだ。私はこのアンケートの結果に感心し、この企画の実

現に向けて動き出した。北さんとガイさんは急に忙しくなり、急ピッチでプログラムを練る。私は私で卒業生や若手コーチに案内を出すなどしてこのプログラムに参加するチャンスを多くの人に与えようと動いた。

しかし、飛行機の手配や現地との折衝のタイムリミットぎりぎりです。実現可能になったこのプログラムも、すんなり行くかと思っただらそうでもなかった。学校という砦を陥落させるのが大変だったのである。というのも、あの服部君事件（ハロウインのお祭りの時、日本人留学生がピストルで射殺された事件）がまだ世間の人々の記憶から消え去っていなかったし、他にも日本の学生が外国旅行をしている最中に災難に遭ったニュースが飛び交う中、私一人の引率で三三人もの生徒を海外旅行に参加させることが、安全性の面で大丈夫かというので学校側が非常に慎重になったのである。この問題は高校の問題だけでなく学園の理事会にまで持ち上げられて審議された。

しかし結局、スポーツ選手の旅行だし日頃訓練されている生徒の団体旅行だから大丈夫だろうということまで一件落着を見た。それが四月下旬である。北さんがこのプログラムを持ち込んでから三ヶ月半。本当にタイムリミットぎりぎりであった。以下、具体的な内容を紹介します。まずは全行程から。

九日 昼過ぎ、長崎空港を飛び立つ。長崎 ソウル シカゴ。バスでシカゴ フォンデュラック

九日 夜九時頃、ウイスコンシン州のフォンデュラック（FOND DU LAC）という町にあるマリアンカレッジの寮に到着（オシユコシユの寮と体育館が使えずここに急ぎよ変更された）
一〇日 マリアンカレッジの体育館で、午前・午後・夜の三部クリニックを受ける。指導担当はウイスコンシン大学オシユコシユ校女子チームのヘッドコーチ、キャシーベネット

十一日 上級生チームは前日と同じスケデュールでクリニックを受ける
下級生チームは、フォンデュラックの隣町オムロハイスクール体育館で行われる、オムロバックボールクラブトーナメントに出場。一年生全員と、二年生からひとりだけ池田を加えてチーム編成。コーチは同行した対馬高校の平野先生が担当。

予選リーグ 鶴鳴 七三十一 O M R O M A R O O N

鶴鳴 四二一三五 RONCALLI

鶴鳴 四六一三七 WINNECONE

準決勝戦 鶴鳴 四六一七一 C O L U M B U S

十二日 下級生チームは昨日上級生チームが受けたクリニックをマリアンカレッジで受ける。

上級生チームは昨日下級生チームが参加した大会の上級生の部に出場。

予選リーグ 鶴鳴 六一二五 O M R O

鶴鳴 六一二六 K A U K A U N A

鶴鳴 七四二二 W E Y F R E M O N T

準決勝戦 鶴鳴 六四一三五 RONCALLI

決勝戦 鶴鳴 七九一四五 O S H K O S H N O R T H

十三日 オムロの隣にあるオシユコシユという町のノースハイスクール体育館で、午前中はクリニックの総復習。午後はマーケット大学女子チーム（ディビジョン）のヘッドコーチ、ジムジェイピア氏と、ウイスコンシン大学グリーンベイ校男子チーム（ディビジョン）のヘッドコーチ、ディックベネット氏のレクチャーを受ける。

十四日 ウイスコンシン州内観光とアップルトンという町で野球観戦。

十五日 イリノイ州のグレートアメリカという、ものすごくでっかい遊園地で遊び、そして近くにあるアウトレットモールでショッピング。

十六日 シカゴブルズのホームアリーナであるユナイテッドセンター第四ゲートの前に建立してあるマイケルジョーダンの銅像の下で記念撮影。さらに、シカゴの中心街にあるマイケルジョーダンレストランで昼食。そしてシカゴの街でショッピング。

十七日 昼過ぎ、シカゴのオヘア空港を飛び立つ。

十八日 夜八時半、福岡国際空港に到着。

次に順を追って感想を述べよう。

まずフライトだ。海外旅行というと聞こえはいいが、エコノミークラスの座席で十三時間も飛行機に乗るのは大変である。私がまだ大学生の頃、急行雲仙という夜行寝台列車で大阪まで何回も遠征したことがあるがそれよりも辛い。飛行機のエコノミークラス座席は、足下の空間も座席幅も非常に狭く、身動きができないのである。

しかし、辛かろうが退屈であるうがともかくシカゴに到着。それからミシガン湖畔の高速道路九四号線をチャーターバスで北上し、四時間のドライブで、ウイネテゴ湖畔の小さな町フォンデュラックにたどり着いた。到着時刻は夜の九時。マリアンカレッジの寮でシャワーを浴びるとすぐ寝る時間だが時差ボケで眠れはしない。ボートとしているうちに夜が明けてしまった。朝食は学内のカフェテリア。宿舍の寮からは歩いて約五分だ。その間ずっと目が覚めるような緑の芝生。フォンデュラックは旭川と同じくらいの緯度だから真夏でも涼しい。さわやかな空気を胸一杯に吸ってカフェテリアに向かう気分は最高だった。それだけで長時間のフライトの疲れと時差ボケの不愉快な気分は吹っ飛んでしまった。

朝食を終えるとさっそくクリニックが始まる。実は、今回の遠征は少し不安な気持ちで私は参加していた。というのは、忙しいアメリカのコーチのスケジュールの中に割り込んで企画されたツアーだということを知っていたので、私たちはあまり歓迎されていないのではないかという気持ちがあったことと、私のバスケットボールを、本場アメリカのコーチがどのように評価するのだろうかという不安があったからである。

しかし、クリニックが始まった途端にその心配は吹き飛んでしまった。キャシーは義理で指導するどころか、すごい気迫で自分が持っている知識を鶴鳴の選手に伝えようとする。「キャシー・ベネットはただものじゃないぞ」それが私の最初の感想だった。

その次に感じたことが「アメリカは合理主義だと聞いていたがほんとにそうなのかな？」だった。私がチームを連れて初めて海外に遠征したのが一九九一年の三月。お隣の韓国だった。この時は全国優勝を狙っていたので、少しでも多く練習試合をしてもらいたかった。しかし韓国側は一日に一試合しかやってくれなかった。「一日に何試合もすると集中力が持続できないよ」というのである。そんなことがあったので、日本や韓国よりもはるかにあくせくしないアメリカでは、クリニックよりも休憩時間のほうが長いのではないかと思っていたがそれはとんでもない誤解だった。休憩時間どころか、食事の時間もゆっくりとれないほどの強行軍で、しかも午前・午後・夜の三部クリニックなのである。

試合がまた大変だった。予選リーグから決勝戦までを一日で消化するのだ。だから優勝戦まで駒を進めると五試合連続になる。決勝トーナメントに入ると食事を取る暇もない。選手たちは試合の合間にバナナを食べながらプレイを続けた。しかし大変なのは選手だけではない。スタッフや審判も大変だ。決勝戦の前に、午前中にも審判をしていた人に、「連続だろ？何試合目？」と聞いたら、彼はだまって片手を広げて見せた。五試合連続という意味である。ということは、午前中の第一試合目からずっと連続で審判をしているということだ。クリニックの世話をするヘッドコーチやアシスタントコーチもまたよく働く。私たちにバスケットボールを指導するだけでなく、会場作成の椅子運びからシユーティングのボール拾いから、宿泊の世話から食事の世話まですべてスタッフがやるのである。決して自分のチー

ムの選手をアゴで使って働かせ、自分はふんぞり返っているというようなことはしない。これもまた、アメリカに来て感動したことのひとつである。

試合のことを少し話そう。今回のプログラムはキャシーのクリニックを受けるだけではなく、オシユコシユ近郊の高校生が集って競い合う第二回オムロバツクボール女子トーナメントに、鶴鳴も出場させてもらうことになっていた。私はアメリカの高校生のレベルがわからなかったため、日本を出発する前に「小さい選手ばかりだしとてもアメリカのチームには太刀打ちできないだろうから、弱いグループに入れておいてくださいよ」と、ガイさんに頼んでおいた。

トーナメントに集まったチームのレベルはまちまちだった。中には長崎の県大会でさえも三回戦レベルだと思われるチームもあるし、日本のインターハイでもベスト四は確実だろうと思われるチームもある。これはあとでわかったことだが、アメリカの人たちはゲストをとても大切にしている。ところが、日本の女子高校生を初めて招待する主催者は、鶴鳴がどれくらいのレベルかわからない。だから、ゲストの鶴鳴が全敗にならないように、さまざまなレベルのチームを揃えておいてくれたのである。

キャシーもガイさんも、予選リーグでは鶴鳴が勝つような相手を選んで組んでくれていた。だからまず、鶴鳴が予選リーグで負けることはない。しかし決勝トーナメントはそうはいかない。私は、組み合わせを見てひとつ勝てればいいと思っていた。ところが鶴鳴のチビッコ軍団は試合を重ねる度に強くなり、次々と勝ち進んでいった。そして観客からスタンディングオベーションを何度も受けた。

どのチームにも一八〇センチ以上の選手が三人はいるのに、インサイドプレーは次々と鶴鳴のクイツクハンドの餌食になるし守っては鶴鳴のパッシングとムーヴィングについてこれない。さらに工藤雅子・大野慎子・副田裕子の超チビッコトリオのスリーポイント攻勢には手も足も出ない。結局全試合ともほぼ三〇点以上の大差をつけて鶴鳴が優勝してしまった。このことは私たちにとって実に大きかった。その訳はもう少しあとで話す。とりあえず、現地の新聞が取り上げてくれた記事を紹介しよう。

「日本チームがオムロハイスクールトーナメントで優勝！」

日本の高校生女子バスケットボールチーム「鶴鳴」が土曜日オムロ口にやって来て、第二回オムロバツクボールドクラブ高校女子クラシックに参加した。鶴鳴は近郊から集まった強豪チームを次々となぎ倒して優勝し、観戦したファンに強烈な印象を与えた。鶴鳴は十六才から十七才の年齢の生徒で組織されており、オフシーズンはなく、年中練習や試合をしている。鶴鳴は週に平均六日、一日三ないし四時間の練習をしている。彼女たちと戦ったオムロハイスクールのカレン・コート選手は、鶴鳴の印象を次のように語った。「彼女たちはチームプレイの選手としてとても優れているわ。彼女たちは誰一人として『チームが今何を必要としているか』を知らない人はいないわ」

鶴鳴は優勝戦で勝利を得た後、観客からスタンディングオベーションを受けた。試合が進むにつれて多くの観客が、鶴鳴の少ない反則、少ないターンオーバー、そしてボールが一度も床に触れることなく次々とパスされてゴールに持ち込まれる華麗なプレイ、それらに見とれて無口になっていった。しかし、彼女たちにとってはここで優勝することだけが目的ではなかった。ここ、オムロに来て多くの友達を得ることが楽しみの一つでもあった。「私たちの目的の一つはアメリカで友達をたくさん作ることです」十七才の櫻田綾香はそう言った。鶴鳴はキャシー・ベネットのクリニックやディック・ベネットのクリニックも楽しんだようだ。

鶴鳴は、コーチ山崎（コーチ歴二九年で全国大会二回優勝）に率いられている。彼はアメリカでの試合の印象を次のように語った。「もっとも大きな違いはサイズです。アメリカの選手は大きい。だから私たちはアウトサイドゲームとトランジッションゲームをやらざるを得なかった」

鶴鳴の選手の多くは、あの原爆投下地の長崎出身である。今年が原爆投下五〇周年の年だ。しかし日

米の選手たちは今、戦うだけでなく互いの友達を作ろうとしている。

最終日はクリニックの総集編とゲストスピーカーの講義である。最初の三〇分はマーケット大学（デイベジョン）の女子チームコーチ、ジム・ジェイビア氏だ。次の三〇分がウイスコンシン大学グリーンベイ校からの夏、ウイスコンシン大学マディソン校男子チームのヘッドコーチに移籍したばかりのディック・ベネット氏である。彼はキャシーの父親でもある。それぞれ、自分のチームで大切にしている考え方や技術を紹介してくれたが、「この人は哲学者みたいな人だなあ。風格が違うなあ」というのがディック・ベネット氏の印象であった。

三日間キャシーにつきあった後でディック・ベネット氏に会い、彼のことはや態度を聞いていて「ああ、この親にしてこの子ありか」と納得した。一人とも、真実を追い求める真摯な姿勢と深い人間愛がわずかな表情の変化やちょっとしたことばの端々ににじみ出ているのである。そして、クリニックの二日目、そのキャシーに私は次のように言われた。

「コーチ山崎、鶴鳴のスパイシングとタイミングはすばらしいわ。どんな練習をしたんですか？」

「うーん…。ランニングスルーってんだけど、ことばで説明するのは難しいよ」

「それじゃ今日の午後はコーチ山崎が鶴鳴の選手を使ってクリニックをやってくれないかしら」

「エーッ！。でも私のやり方はことばが非常に重要だから通訳を介してのクリニックでは無理だよ」

「そう…。うーん、残念だね」

試合結果のところでも言ったが、優勝してしまったことと、キャシーから言われたこの言葉は、私にとっては雷に打たれたよりも衝撃的で嬉しかった。

私は、今の鶴鳴バスケットを四年がかりで創り上げてきた。創り上げてきた過程は第二章で述べるが、このアメリカ遠征の二ヶ月前までは自分が創り上げた作品にかなりの自信を持っていた。全国優勝とまではいかないまでも、ベスト四ぐらいまでは行けるのではないかとひそかに思っていた。しかし、この遠征直前の鳥取インターハイでは、初戦で埼玉県代表の新座総合技術高校に敗れてしまったのである。四年がかりのチーム創りで、かなりの自信を持って望んだ大会だったので敗戦のショックは大きく、実は今回のアメリカ遠征は失意のどん底でのプログラムだったのである。インターハイの後、「やっぱりバスケットボールは素質が第一なのかなあ、小さい選手ばかりではどうにもならないのかなあ」そんなことばかりを考えながらの毎日だった。

それが、今回のクリニックではキャシーから逆にクリニックをして欲しいと言われ、試合では一試合終わる度に観客からスタンディングオベーションを受け、すれ違う人から次々に「EXCELLENT」と誉められ、おまけに優勝してしまったのである。「俺がやってきたことは正しかったんだ！」と私が思ったのは当然、選手たちの表情からも「私たちのバスケットは間違っていないかったんだ」という思いがはっきりと感じ取れた。

感激の極めつけは最終日のスピーチだった。私のサンキュウスピーチのあと、キャシーがスピーチをした。やはり、クリニックと同様キャシーのことばは口からではなく、全身からほとばしり出ていた。キャシーの口からは鶴鳴を誉め讃えることばが次から次に出てきた。そして、キャシーはスピーチの最初から泣いていた。彼女もまた、鶴鳴の選手に出会ったことで感激してくれたのである。特に「HEART OF GOLD」ということばで力を込めて鶴鳴の選手を誉めてくれた時には、もう通訳のサエコさんまでが感激の涙であったのことばをうまく通訳できないほどであった。キャシーは最後に、たどたどしい日本語で「ア・ナ・タ・ガ・タ・コ・ソ ホ・ン・モ・ノ チャンピオン デ・ス」と言っていてスピーチを締めくくった。私ももちろん感激した。鶴鳴の選手と一緒に思ってきたことを、バスケットボールの本場アメリカで、「HEART OF GOLD」という特別の誉め言葉つきで誉められた

のだから。しかし私は、決してアメリカにかぶれたのではない。今回キャシーに会って思ったことは、アメリカでも韓国でも中国でももちろん日本でも、どこの国に行っても、バスケットボールのコーチが人として大切にしているものはみな同じなんだということ強く実感したことである。

キャシーが大切にしているものと私たちが大切にしているもの、それは人間愛と情熱である。私たちはことはば充分に通じないが互いにそのことは強く感じた。だから、「アメリカの選手たちに鶴鳴の選手の手が欲しい」とキャシーは真剣に思い、このクリニックを契機にして何とか鶴鳴から選手をリクルートできないかと考えはじめたのである。広いアメリカには、日本人とは比べものにならないほどの身体的な素質に恵まれた選手があちこちにたくさんいるだろう。そして、鶴鳴の選手がいくら精神面や態度がきちっとしているからといって、アメリカにだって精神のしっかりした選手はこれまたたくさんいるだろう。それなのに、キャシーはわざわざ鶴鳴から、どうしても選手を一人採りたいとこだわった。よほど鶴鳴の選手の態度をキャシーは気に入ったのだろう。

この時点では私も慎子もキャシーの思いが本当に実現するなどとは考えもしなかったし、日本の高校生が、アメリカの大学に正式に入学してプレイするなんて想像もできなかった。ただただ自分たちのバスケットも捨てたもんじゃなれないという思いに浸りきっていた。ところが実は、この時から慎子物語の筋書きはすでに着々と進行していたのである。

試合以外での思い出を少し話そう。十二日。上級生チームの試合の日の朝。アシスタントコーチが運転するバンとガイさんが運転するバンの二台に分乗して、私たちはマリアンカレッジを出発した。行き先は隣のオムロ。オムロハイスクールが目的地である。快晴だし風は涼しいし絶好のドライブ日曜日だ。時間は約三〇分ぐらいのドライブである。

二〇分ぐらい走ったところで空模様が怪しくなり始めた。快晴の空に雲が現れ、それが見る見るうちに空いっぱいを覆ってしまい、一面が夜のように暗くなり始めた。ポツポツと雨つぶが落ち始めたかと思うとたちまちザーッと大雨になり、それが一分もしないうちに、雨というよりもナイアガラの間の中をクルマが走っているような状態になってしまった。私たちはアシスタントコーチが運転するクルマに乗っていたが、彼は見えない道をものすごく用心しながら時速一〇マイル（時速十六キロ）ぐらいのスピードで進む。「この地方はこんな天気時々あるのかい？」と私は聞いた。「ああ、しょっちゅうだよ」とアシスタントコーチは答えた。

やっこの思いでオムロハイスクールに到着し、体育館の入り口につながっている通路に入ると、真っ先に目についたのが、TORNADO SHELTER（竜巻避難所）と書いてある地下室の入り口であった。私が今回のプログラムに参加して、「ああ、ここはアメリカなんだ」と実感したのが、到着翌日の朝、マリアンカレッジの寮からカフェテリアに向かう途中の芝生の緑と広大な敷地であった。二回目に実感したのが、この大雨とTORNADO SHELTERだった。アメリカの映画を見ると、竜巻が襲ってくるシーンが時々あるが、まさにそのまっただ中に立たされた気分だった。ここウイスコンシンを訪問するまでに私は三回アメリカの地を踏んでいる。西海岸が二回、ニューヨークからレキシントンにかけての東部が一回である。この三回の訪問でTORNADO SHELTERを見かけたことは一度もない。私はまたアシスタントコーチに尋ねた。

「この地方にはTORNADO SHELTERがあちこちにあるの？」

「ほとんどの建物にはTORNADO SHELTERがあるよ」

「ほんと？」

私はクリニックでのキャシーにも感激したが、このTORNADO SHELTERにもとても感激した。大雨とTORNADO SHELTERに出会って、私は「映画で何回も見たあのアメリカに私た

「ちは本当に居るんだ」と改めて思った。これもよし、ニューヨークやロスに滞在していたのなら、このようなアメリカらしい現象には出会わなかっただろう。そういう意味ではこの大雨とTORNEDO SHELLERに出会えたことはとても幸せだった。

私の最初の訪問で気に入った町はオレゴン州のコバリスという町だった。そこは、オレゴン州立大学が設立されたので、その周囲に人が集まってきたような小さな町だった。二回目の訪問で気に入ったのはケンタッキー州のレキシントンという町だった。これもケンタッキー大学が設立され、その周囲に人が集まってきたような町だった。三回目の訪問で気に入ったのはビーヴァートンというオレゴン州の小さな町だった。四回目も今回だが、フォンデュラックもオムロも前の三つと甲乙付け難いほどいい町である。いずれもスモールタウンだ。ファッションやショッピングはロスやニューヨークのような大都会の方がうんと楽しめるが、アメリカらしさを味わいたいなら私はスモールタウンの方が絶対がいいと思う。

トーナメントが終わり、クリニック総集編がすべて終了したら後は観光である。最初に案内されたのがアップルトンという中くらいの町。例によってアウトレットモールでショッピングをしたあと、私たちは野球場に案内された。私は野球があまり好きではないがデイヴは大学時代バスケットボールよりも野球の方が得意で、もうちょっとでプロかというほどの選手だったので、どうしてもアメリカの野球を私たちに見せたいのだ。いやだというのに「絶対におもしろいから」と無理矢理誘われて私はしぶしぶ野球見物に出かけた。それは、野茂や吉井が活躍する大リーグではなく、地元のスリーAチームだった。

レベルの低いプレイでお粗末に違いなから時間の無駄使いにしかならないと、半ばふてくされ気味で見に行った野球だったが、回が進むうちに楽しんでる自分に気が付いた。というのは、野球がおもしろいのではなく、球場にいること自体が楽しいのである。プレイのことはよくわからないが、観客がプレイヤーと一体化していて楽しみ方が実に面白い。野球というのは間がある競技なのでその間を退屈させないように運営する側もいろいろ趣向を凝らす。チェンジの間にクイズを出したり、チャガールやお笑い芸人が演技をしたりとにかく観客を飽きさせない。

もっとも驚いたのが、突然場内アナウンスで「みなさん、本日は日本からバスケットボールの女子高校生チームが私たちの野球を見学に来てくれます。紹介します、KAKUMEGIRLS HIGH SCHOOL」と放送した時だ。私たちはデイヴに促されてその場に立ち上がり手を振った。それを見て観客がなんとかかんとか言いながら立って拍手をする。オムロトーナメントでも味わったが、これがスタンディングオベーションである。これを受ける方は本当に気分がいい。アメリカのスポーツ選手ががんばるのはお金のためだけではな、誰からも承認される喜び、それが原動力になっているのだと私は思った。紹介された後は、トイレに行った時も、飲み物を買って席を立った時も、売店におみやげを買って行った時も、すれ違う人に必ず声をかけられた。

「日本のどこに住んでるの？」

「いつまでいるの？」

「ジャパンのコーチですか？うちのむすめもバスケットボールの選手ですよ」

アメリカの人々は本当にスポーツの楽しみ方がうまいし誉めるのがうまい。というより、冒頭から何回も言っているようによいものはよいと認め、そしてそれを素直に表現する心の広さが我々とは違うのだらう。

翌十五日はフォンデュラックを発ってシカゴへ向かう。途中ミルウォーキーを通過。ミルウォーキーといえば昔はビールで有名だったが、私にとってはハーレー Davidson の故郷である特別の町だ。私は桜馬場中学校の教師として昭和四一年の春に赴任して間もなく、メグロという直立単気筒の二五〇C

Cバイクを買った。私はバイクが大好きで、特にクラシックスタイルで重厚な排気音のバイクが好きだ。クラシックスタイルで重厚な排気音のバイクといえばハーレーダビッドソンが王様である。しかし薄給の身では買えない。そこでその代用品としてはこれ以上のものはないメグロを買ったのである。

その後もずっとハーレーダビッドソンを買いたい気持ちはあったが高くて手が出ない。よつやく手にしたのが四五才を過ぎてからであった。最初は中古のFLH。それに二年ぐらい乗った後今度は新車のFLHTC。しかし年々忙しくなり、ハーレーに乗るのは毎日の通勤だけ。遠乗りはまったくできない。それでとうとう一九九三年に手放してしまった。そんなわけでハーレーダビッドソンには特別な愛着があり、高速道路沿いにあるでっかい「HARLEY DAVIDSON」の看板を見たときは、懐かしい故郷に帰ってきたような気分になった。

そこを通り過ぎてしばらくするとグレートアメリカという遊園地に到着した。ここは、広さも遊ぶ施設もデイズニランドより大きく、みんな思いっきり羽をのばしていた。私ごとびついたのはジェットコースターでもなく、アミューズメントシアターでもない。記念撮影コーナーだった。ここでは撮影した写真をコンピュータで合成してお好みのスタイルに仕上げてくれる。私は写真をTシャツにプリントしてもらった。構図は西部劇スタイルにした。

ジョン・ウエインの西部劇に出てくるアリゾナのモニュメントバレーのテーブルマウンテンを背景に、銃を片手に馬にまたがり、遠くに視線を飛ばしている私。背景も馬も銃もすべてイラストではなく本物。顔だけが私である。長崎に帰ってから体育の授業の時もこのTシャツを着て授業をした。

「え？ それって、もしかして先生？」と私のTシャツを見ながら生徒がそう言う。

「そつ、俺。若い頃ハリウッドスターだったんだ」と私。

気分はジョン・ウエイン。私にとっては最高のアメリカみやげになった。

遊園地のあとはアウトレットモールでショッピングをし、その日はシカゴのホテル泊まり。翌十六日はシカゴ観光である。まずはシカゴだから当然シカゴブルズのホームアリーナであるユナイテッドセンター。みんなで第四ゲートの前に建立してあるマイケル・ジョーダンの銅像の前で記念撮影をした。シーズンオフだったので中には入れなかったが、バスケットボールに関わっている者としては最高の喜びだった。

ジョーダンが出たのでついでにここで話しておこう。その日の昼食はマイケルジョーダンレストランで取った。ここは予約をしなければ満員で入れないことが多いらしい。電話をするとジョーダンのあの低くこもった声で「お電話ありがとうございます。食事の予約の方は一番のボタンを…」と聞こえる。一瞬ドキッとするがすぐテープだとわかる。しかしシャレている。食事の内容はアメリカだからピザかハンバーガーの類だ。選手たちは、食事よりも店内いたるところに飾ってあるジョーダングッズや写真の方に興味があったようだった。

アメリカでの食べ物のお話をしよう。私はアメリカで食べ物を注文する時はいつもスモールサイズを注文する。しかしそのスモールサイズも、食べ物によっては日本の特大サイズに匹敵するものがある。いつもお持ち帰りにして欲しいと思うがなかなかそれを言う勇氣が出ない。かと言って私は食べ物を残すのは嫌いだからほとんど平らげる。だから、アメリカから帰った後は必ず特別ダイエットをしなければならぬ。バスケットの試合会場で売っているポップコーンなんか、Lサイズを頼むと「これはバケツか？」と思われるような紙製のカップに山盛りしてくれる。アメリカの人たちはそれをちゃんと食べるからすごい。

これは、言うては失礼になるのかもしれないが、私は保健体育の教師だし、医学には特別興味があるから気になるので敢えて言う。アメリカの印象は「EVANSVILLE」の項で述べたように、「広

い」と「困いが無い」だったが、実はもうひとつある。それは超肥満の人をあちこちで見かけることである。それも普通のダイエットではなく、入院するかなにかして治さなければならぬような肥満である。私の考えでは、アメリカの人たちは食生活を真剣に見直さなければならぬ人が非常に多いと思う。

さて、話を観光に戻そう。ユナイテッドセンターの後はバスでミシガン湖畔のなんとかという公園に行き、その後なんとかという高層ビルに昇った。ミシガン湖畔の公園では、ただ美しく雄大な景色の中で記念撮影をただけだが、何をするにも好奇心旺盛な私は石垣つたいに湖面まで下り、湖の水を人差し指につけてなめてみた。ひよっとしたら塩辛いのかなと思って。でもなめた味は真水の味だった。

読者は「あはは、ばかだなあんたは、湖だもん真水に決まってるよ」と笑うかもしれない。でも、まったく向こう岸が見えない湖を眺めていると、「こんなに広くてもやっぱり真水かなあ」とほんとに思う。そう思ったのは絶対に私一人ではなかったはずだ。ただ、実際に行動を起こす勇気があったのが私だけだったのだと思う。

それから例のタワーに行った。名前は忘れたが世界で三番目に高いビルだとか。最上階まで昇るとそこには展望台とおみやげ屋さんがある。窓に近寄って外を眺めると高所恐怖症ではない私でさえもスーッと吸い込まれそうで足がむずかしくなってくる。ここではブルズのエンピツや腕時計など、小物のおみやげをたくさん買った。

午後からはショッピング。ダウンタウンで放り出され、約三時間の自由時間。選手たちは、ほとんどスポーツ用品店とか普通のおみやげ屋さんを巡回していたが、私は卒業生からただひとり参加した小島純子（鶴鳴 三菱重工 引退）のショッピングガイドを受け持たざるを得なくなった。生徒たちはせいぜいスポーツ用品巡りだが小島は一応ＯＬだからファッションに目が向く。彼女は身長一七五センチと、普通の日本女性としてはビッグサイズだから、日本ではセンスもサイズもピタッとくるのがとても少ない。ところがアメリカでは小島程度のサイズは目移りしてどれを買おうかと迷うぐらい品数があるのである。しかも日本に比べると値段がとても安い。

最初は小島も要領がわからずにうろついていたが次第に要領がわかってきて動きが忙しくなり始めた。彼女は靴が欲しかったらしく、ブランド品が並ぶシューズコーナーで熱心な品定めだ。ある靴をとって履いてみる。気に入ったようだ。

「先生、この靴とっても履きやすい。デザインもいい」

「フーン…。何？これフェラガモじゃない。当たり前だよ。そりゃ履きやすいはずだ。でも高いよ」「何ですかそのなんとかガモって？私カルガモなら知ってますけど」

私は彼女がフェラガモを知らずに靴を品定めしていたのに驚いたが、ブランド名にこだわらずに名品をちゃんと見抜いていたその目にもおどろいた。彼女はもうひとつブーツのいいのを見つけた。しかしフェラガモが高かったのと同じようか迷っている。私は「これ、買うかもしれない。またあとで来るから」と店員に言った。「わかりました。じゃ、奥の方にしまっておきます」と言っただけでその店員はブーツをカーテンの奥にしまい込んだ。

次はファッションコーナーだ。そこをブラブラしていると「ON SALE」の文字が見えた。小島を促してそこへ行ってみる。なんとジョルジオ・アルマーニのスーツがバーゲンで出ているのである。色は黒。品数は三点。「おい、アルマーニだぞ。アルマーニがバーゲンだぞ、おい」と私。最初は用心深そうに品定めをしていた小島だったが、スカートを少し点検したあとでどの部分が気に入ったのかわからないが、「あ、これいい」と彼女も乗り気になった。また私が交渉役だ。

「これ、試着できる？」

「あ、どうぞ奥で」

右端のヤツは小さかった。しかし真ん中のヤツはピッタリだ。品のいい年輩の女性店員がさらに言う。
「そのスーツなら、このブラウスを中に着るとばっちりですよ」

また試着。小島は結構ファッションにはうるさい。そしてこの店員の女性とはウマが合うらしい。
「ウーン、さすがだ。これ、ピッタリ」と気に入る。

しかし、お金を払う時になってひと騒動起こった。もう閉店間際。閉店の音楽が鳴っている中で小島は支払いをしようと思って財布を見た。現金が足りない。それではカードで思ったがカードはバスの中に置いてきた別のバッグに入れたままで。取りに行ったら閉店になるし、明日出直しというわけにはいかないし、日本まで配達してもらうわけにはいかないし、困った。

「じゃ、あのブラウスを買わなかったらいくら？」

「一一五〇ドルです」

「あー、でもあのブラウスも欲しい」

「ちょっと待って、俺持ってるお金計算してみる」

「え、全部でいくら？」

「まだ足りない。待てよ、こっちのポケットにもさっきのおつりがあったはず」

と、大騒ぎしながら一セント硬貨まで使ったの支払いでなんとかセーフ。ところが小島はブーツを思い出した。

「あらーっ、あのブーツどうしよう」

「バカ、カードはバスの中だし、現金はないし、閉店だし、集合時間三分前だぞ、どうにもなるもんか」

「でも、あー、あのブーツよかったですよー」

「急げー」

小島はそれから二年間くらい、「あのブーツ」「あのブーツ」と言い続けていた。